大正女子國文讀本 巻六

375.9
M019
資料室

42181
教科書文庫
4
810
42-1918
20000
39914

資料室

大正七年十二月二十一日
文部省檢定濟
女學校國語科教科用

375.9
H019

保科孝一編

大正女子國文讀本

東京 合資會社育英書院

廣島大学 教 39914

大正女子國文讀本 卷六

目次

一 禁庭の野分（昭憲皇太后御記）……一
二 秋草を皇后宮に奉りける詞……小池道子……三
三 歌話三則……六
一 秋の青柳……（古今著聞集）……六
二 關の秋風……（古今著聞集）……八
三 弓張月……（十訓抄）……一〇
四 我が國民と自然その一……芳賀矢一……一一
五 我が國民と自然その二……一五

六　牧兒の歌（韻文）……武島羽衣…二一
七　松茸送り來し禮を長濱なる人に……高桑文子…二五
八　秋日和……二九
一　菊日記……二九
二　小春日和……國木田獨歩…三二
九　猫板俳諧……沼波瓊音…三六
一〇　をさな兒……小林一茶…四三
一一　勝重妻と謀る……新井白石…四七
一二　赤十字社……五二
一三　ナイチンゲールその一……德富蘆花…五六
一四　ナイチンゲールその二……六二

一五　忘れがたみ……外山正一…六八
一六　海の親み……吉江孤雁…七五
一七　鹽井川渡り……十返舍一九…八二
一八　常磐雪行……池邊義象…八七
一九　香港……下田歌子…九三
二〇　四時の變遷……大町桂月…九八
二一　新年のたより（書簡文）……一〇四
一　年たつけふの壽……北垣種子…一〇四
二　新春母の許へ……賴山陽…一〇五
二二　鎌倉一見の記……正岡子規…一〇八
二三　女と趣味……巖谷小波…一一四

二四　桃の嫩葉……上杉治憲…一二〇
二五　中島歌子……一二三
二六　諺と道德……一三〇

帝國圖書館藏

大正女子國文讀本　卷六

一　禁庭の野分

（昭憲皇太后御記）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄かにかき曇り、夕づつの光も見えず。とかくするほどに雨いたく降りいでて、ほとり近く語りあふ人の聲だに、聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は、尙雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへなりはたゝきて、夢現とも思ひ定めぬに、ひまなく稲妻のきらめき渡る、いとけうとし。曉がたには、雨はをやみぬ

上　明治天皇明治十四年北海道及び東北地方を巡幸せさせ給ふ。

皇太后　英照皇太后。

階段

れど、風烈しう吹出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとど目も合はず。

上*には民のためとて、畏くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にまし〳〵て、此の風の音に御心を惱まし給ふらん。皇*太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひ續くるほどに、夜も明けぬれど未だ風靜まらで、いづこもおろし籠めたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。今をさかりなりし眞萩も、名殘なく散亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、ましてあやしげ

科戸の神　志那斗辨神とも申し、志奈都彦・志奈都姫の二柱の神にて風を司る

小池道子　京都の人、宮内省に出仕して皇后宮に仕へ奉る、國學和文の才あり歌名特に高し

なる賤が家居などは、倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。

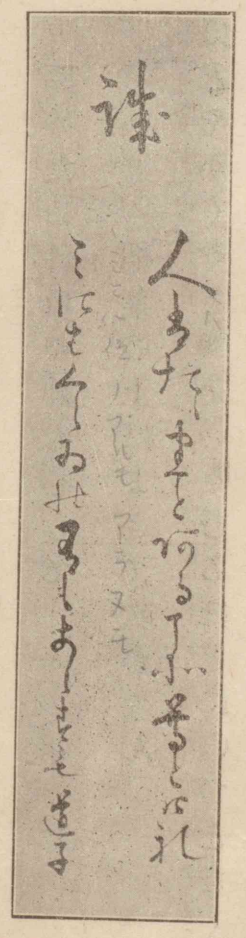
おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稻も、吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のため科*戸の神も心して
稻葉の上はよきて吹かなん

なほとやかくやと胸をいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるにおのづから人の心もおちゐにけり。

二　秋草を皇后宮に奉りける詞　小*池道子

秋のみやまの奥深くすませ給ひながら、荒野の末の草のかき葉にさへ、み心をとゞめさせたまへるは、まことに國の親とあふがれたまふべきにこそおはしましけれ。出でましの折々にも、賤が家のありさまどもみそなはす序には、つくろはぬ垣根の萩すゝきなどにさへ、御目とゞめさせ給へること多かるに、今年は世の中に恐ろしき病のひろごりぬればとて、秋草の盛りも御覽ぜさせねば、前栽のすゝきを鉢に移し植ゑて、



小池道子筆蹟

出でましの稀なる秋にあひてこそ
すゝきもはちに移されにけり

と添へて奉りたる、物ぐるほしのわざやと、われながらをかしかりしに、

わがために移し植ゑたるま心は
ほにあらはれて見ゆる秋かな

と打ちながめさせたまひたる、かしこまり聞えさせん方なけれど、

さゝげつる一もとすゝき御惠の
しげき蔭ともなりにけるかな

淺茅が中に生出でて、穗にあらはれたる秋のうれしさを忘

れじとてなん。（柳の露）

三　歌話三則

一　秋の青柳

花園左大臣家に始めて參りたりける侍の、名簿のはしがきに、「能は歌よみ。」と書きたりけり。大臣、秋の初に、南殿に出でて、はたおりの鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、「下格子に人參れ。」と仰せられけるに、「藏人五位たがひて、人も候はぬ。」と申して、この侍參りたるに、「たゞ、さらば、汝おろせ。」と仰せられければ、まゐりたるに、「汝は、歌よみなる。」とありければ、畏まりて、御格子おろしさして候に、「この促織をば聞くや、一

花園左大臣　源有仁なり、輔仁親王の子にして和歌音律に巧なり。

首仕うまつれ。」と仰せられければ、「青柳の」と初の句を申し出したるを、候ひける女房達、をりにあはずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、「物を聞きはてずして、笑ふやうやある。」とおほせられて、「とくつかうまつれ。」とありければ、

青柳のみどりの絲をくりおきて
夏へて秋ははたおりぞ鳴く

とよみたりければ、大臣感じ給ひて、萩おりたる御直垂、推出して賜はせけり。

寛平歌合に、はつ雁を、友則、

春霞かすみていにし雁がねは
今ぞなくなる秋霧の上に

寛平　宇多天皇の年號。

友則　紀氏、古今集撰者の一人。

とよめる、左方にてありけるに、五文字を詠じたりけるとき、右方の人こゑ〴〵に笑ひけり。さて次句に「かすみていにし」といひけるにこそ、音もせずなりにけれ。おなじことにや。（古今著聞集）

能因　俗名橘永愷、歌人、白河天皇の御代の人

三島　越智郡大三島宮浦なる三島神社なり。

二　關の秋風

*能因入道、伊豫守實綱に伴なひて、かの國に下りたりけるに、夏のはじめ、日久しく照りて、民のなげき淺からざるに、神は和歌にめでさせ給ふものなり、試みに詠みて三*島に奉るべき由を、國司頻りに勸めければ、

あまの川苗代水にせきくだせ
あまくだります神ならば神

と詠めるを、みてぐらに書きて、神司（カンヅカサ）して申し上げたりければ、炎旱の天、俄かに曇りわたりて、大いなる雨降りて、枯れたる稲葉おしなべて綠に反りにけり。忽ちに天災を和ぐること、唐の貞*觀の帝の、蝗を呑めりける故事にも劣らざりけり。この入道は、至れるすき者にてありければ、

都をば霞とともにたちしかど
あきかぜぞふく白川のせき

と詠めるを、都にありながら此の歌を出さむこと、念なしと思ひて、人にも知られず、久しく籠り居て、色黑く日にあたりなして後、陸奥國のかたへ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。（古今著聞集）

貞觀の帝　太宗皇帝なり蝗を呑みしことは、貞觀政要に出づ。

白川の關　岩代國西白河郡にあり。

三　弓張月

高倉の院の御時、御殿の上に鵺の啼きけるを、惡しきことなりとて、いかゞすべきといふことにてありけるを、或人、*賴政に射させらるべき由申しければ、「さりなむ。」とて、召されて參りにけり。この由を仰せらるゝに、畏まりて宣旨を承りて、心中に思ひけるは、「晝だに小さき鳥なれば得難きを、五月の空闇深く、雨さへ降りて言ふばかりなし。我既に弓箭の冥加盡きにけり。」と思ひて、八幡大菩薩を念じ奉りて、聲を尋ねて矢を放つ。應ふるやうに覺えければ、寄りて視るに、あやまたず中りにけり。天氣より始めて、人々の感歎言ふばかりなし。*後德大寺左大臣、その時祿をかけられけるに、かく

賴政　源氏、晩年に薙髮して眞蓮といふ、英武にして知略あり、射を善くし、和歌に巧なり。（一七九〇―一八四〇）

後德大寺左大臣　藤原實定、右大臣公能の子、歌人なり。（一七九九―一八五一）

なむ、

杜鵑名をも雲居に揚ぐるかな

賴政取りあへず、

弓張月のいるにまかせて

と附けたりける、いみじかりけり。罷り出でて後に、「昔*養由、雲外射鴈、今賴政雨中得鵺。」とぞ感ぜられける。（十訓抄）

養由　養由基、支那周代の楚の人、射を善くせり

四　我が國民と自然その一

芳賀矢一

四　我が國民と自然その一

芳*賀　矢　一

日本の氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉、四季をり〳〵の風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が、現生活に執着するのは自然である。我等の前に横たはる

芳賀矢一　福井市の人、文學博士、東京帝國大學文科大學教授。

四圍の風光は、すべて笑つて居る中に、住民が獨り笑はずに居られようか。　現世を愛し人生を樂しむ國民が、天地・山川を愛し、自然にあこがれるのは當然である。　殊に我が日本人の花鳥風月に親しむことは、其の生活の何れの方面に於いても見られることである。

上代に於いての衣食住は、多くは我が國土に繁茂して居る植物界から材料を取つた。「千木高知り」といふ千木も、「太敷立て」といふ宮柱も、皆木材であつたことはいふまでもなく、これを括りつけるには、藤葛を以てした。　いはゆる「綱根ゆるぐことなく」といふ綱根である。

楮衣のしろたへ、麻衣のあらたへ、之を染めるは草木の汁であつた。　正木・日蔭等の蔓草を取つて、かつらともし手繦ともした。　梓・櫨・檀を以て弓をつくり、柳・篠を以て矢をはいだ。柳は矢の木である。　葉盤・葉椀は、木の葉を編んだものらしく、今の茅卷・柏餅にその名殘をとゞめて居る。　到る處植物の繁茂した國土は、國民に向つて、衣・食・住の材料をすべてそれから供給したのである。

日本の少女の着物の模様のはでやかなのは、西洋人の著書にも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、なほさら是よりも綺麗である。　自然に衣服にも之が染まつて來た。　昔のしのぶの摺衣、今の振袖模様、つまりは同じ事である。　菊や櫻や梅や牡丹を大きく染出した縮緬其の他の友

しのぶのすり衣　しのぶもぢずりともいふ、忍草の葉を交互に打亂して摺りつけたるもの。

禪物、繻珍の帶から下駄の鼻緒まで、自然界の草木や花の模様で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色・黃櫨・木蘭地・朽葉など、植物界から取つた名が多い。昔の女裝束で、櫻がさね・梅がさね・山吹がさね等、かさねの色合は、つねに四季をり〳〵の花に因んであつた。やさしい女流の裝束には當然ともいはうが、武士の戰爭にいで立つ甲冑裝束にも、小櫻縅・卯の花縅・澤瀉縅・齒朶革縅などがあるのは、如何にも優美ではないか。總じて我が國の甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、如何にも美しいものであつた。胴にも唐草を畫がいたり、裾金物にも蝶をつけたり、直垂の菊綴、その袖の露といふ名稱、甲冑にも杏葉とか、草摺とか、菱縫の板とか、何れもやさしい名稱である。馬の鞍にも、青貝をおいて花なぞを散らしてある。銜にも葉銜がある。旗さしものにも、蝶や笹龍膽や澤瀉をつける。今日の家々の紋にも、桔梗・櫻・梅鉢・澤瀉・葵・牡丹・蔦・梶の葉・藤・松等の類が最も多いのも、當然の結果である。

五　我が國民と自然　その二

我が日本人の生活が、いかほど植物及び自然界に趣味を有するかを、食物の方面から見ると、春秋の彼岸の牡丹餅・お萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見すると、一層その多い事が分る。松風・紅梅燒・磯松風・桃山などの一般名稱はい

ふまでもなく、椿餅・撫子餅・鶯餅の外、植物以外の自然に取つたもので、洲濱・時雨・越の雪・落雁・鹽竈・さゞれ石等の類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子は別して、松の葉や菊の花や、すべて花木の形に造るのである。魚類の料理も亦植物界・自然界とは離れぬ。さしみのつま、鮓のつまには、笹の葉を敷く。牡丹餅を贈るのには、重箱に南天の葉を敷く。これは毒を消すとか何とかいふまじないから來たものであらうが、葉盤・葉椀の名殘もあらう。膳椀は金蒔繪で、花木の形を裝飾とする。漆器一切の美術工藝品が、草木・花鳥の繪であることは、もとよりいふまでもない。茶の湯の棗などは當然として、匙を蓮華といふなども

古事記　日本上古の歴史、元明天皇の時、太安麿の撰せるもの

日本書紀　日本上古の歴史、元正天皇の時、舍人親王・太安麿等勅を奉じて撰す。

優美である。

花木の美を愛するところから、女の名に優しい美しい花の名をつける事が最も多い。昔から、美人と花とは何處の國の文學でも離れぬもので、花を美人に喩へ、美人を花に喩へるものであるが、古事記・日本書紀の歌の中にも、早く已に美人を櫻に喩へ、一本菅に喩へ、また大根に喩へてある。これは色の白いのを言つたのであらう。

「挿花の術、箱庭づくり、盆景の山水、みな我が國人獨得の伎倆であつて、獨得の發達をして居る。花を活けるにも、又これを畫がくにも、その生きたまゝにするのが美しい點である。枝をむしり取つて、花ばかり挿しこむのは西洋の挿花であ

るが、自然の枝根をそのまゝに、天地の配合よろしくあらはすのが、挿花でも、盆栽でも、日本人の長處である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。我が國の文學に、自然を吟詠したものの數多いことはいふまでもない。繪畫が花鳥を以て優つて居る事や、彫刻も花鳥の方が多い事や、音樂も人聲よりは自然の音色に近い事や、また宮殿の朱塗の建築も、松杉の茂つた背景で、一層その美をなす事を考へて見れば、我が國の古來の文學が、自然界をうたふのを殊に長處とし生命として居たことがわかる。上古から近世に至るまで、歌の大半は花鳥風月の題詠であつた。

日本人ほど、國民全體が詩人的なのは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で、歌を作る人はどの位の數であらう。宮內省の毎年の詠進は、何萬といふ數である。歌を作らぬでも俳句を作る。どんな片田舍にも、俳句の宗匠は居る。八百屋・魚屋は勿論、質屋でも、金貸でも、下手の横ずきは到る處に多い。神社奉納の額面は、到る處に小詩人の名を列ねて居る。短くて作り易い短詩形であるから、上手でこそなけれ、何人も作つて、花見遊山の時にも一興とするのである。此の花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人はまことに忙しいのである。惡事を働いて死刑に處せられる大惡人でも、死に臨んでは

一首を口吟むといふやうなのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は國民を擧げて、抒情詩人である叙景詩人であると言つてもよろしい。

それゆゑ我が國民は、隱居すれば盆栽いぢりをする、歌や挿花に慰安を求める。日本人が世の中を厭ふといへば、風流三昧に日を送る。西洋でいふ厭世は、本當に此の世の中が厭になるのである。日本人の厭世は、唯人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかつて、花鳥風月に近づけば、それでいやな思はなくなるのである。我が國民の自然に對する關係は、他の國民のとは違つて、深遠に且重大なものがあるのである。

（國民性十論）

武島羽衣
名は又次郎、東京高等師範學校講師。

牧兒の歌

武島羽衣

秋の野道

六　牧兒の歌　二一

心あらうたゆみうれ

雲ゐなる峯にのぼりそは

風ふき荒れすさびて

行きて聞べふまどりそは

ゆくとたふたふなり

朝ふ出づる友そは

たづさはる中とこの山を

夕ふかうつる友そは

まくらはなとこのそふそ

俗界

ちりの巷に我ふまどれば

なげかしふ世の雙のあし

うがねと為ふ我迫づれば

うるはしたる おのがねね

金十名舉ガ示シタモ思ハレタ

まげれを望ふ面すぎて

形ふ月ハかくれを

種子蒔と学のひとは

長濱　滋賀縣阪田郡琵琶湖の東岸にあり、縮緬天鵞絨等を產す。

七　松茸送り來し禮を長濱なる人に

秋晴の空心地よく、いづこにまれ旅立もせまほしき思、隣の寺の樫の木の枝つたひ飛行く美しき羽色の小鳥を眺めながら、立並ぶ大木の下に栗にても拾ひたらば、松林の中にわけ入りて茸狩にてもせしならば、さては澄渡りたる海の面に小舟うかべて、鮒釣もせまほしなど、いつまでものんきなること思ひ續けゐし折しも、はしためが持てこしもの、開き

見るよりえならぬ薫に、皆々つどひ參り候。「此の新しきを蒸燒にして。」と主人の申候へば、「いや、松茸飯にしてよ。」と子供らはせがみ居り、遠き此のあたりまでも忘れまさで、年々送り給はる御志の程忝なく、主人よりも宜しく御禮申上ぐるやう申出候。

松山かけめぐりて、こゝに一つかしこに一つと、子らのめつけたらん時の喜よいかに、一度連れて行きたしなど思ひゐるうち、ふと過ぎにし事のつぎ〳〵と胸に浮び出でられ候。都に生れ都に育ちし私は、茸狩の樂しさはつゆ知り申さず候ひしが、七八年前姫路にありし時、三度程參り候。一度は大阪の人よりの招に、茨木停車場より七里程山奥なる、其の

茨木　大阪府三島郡に在り、大阪の北約四里。

人の別莊に三夜泊りて、日に幾度となく後の山に取りに參り、終には茸のみの馳走と、あまりの寂しさに飽きて、歸りたうなりし事も候ひき。　又師團長の子達、中佐の家族と共に、姫路より一時間許り乘りし何とやらいふ停車場に下りて、松山の一部を買占め、茸狩せし事も候ひき。　茸の蔓見出でし喜、小鳥の聲そこ〳〵に聞えて、田畑・常磐木見渡す山の上に飯たきて、二十人あまりが輪になりて、鷄の肉と共に煮し味、今に忘れられず候。　今一度は七八人にて、紅葉尋ねての歸さ、山又山のはざまに、二三本見出でしのみなるに、山守の翁に問ひ候處、「昨日大勢づれにて此の山へ來りしが、取去りたる後なれば。」との答に失望致し、「さらば他の山に行かん、先

づ荷を輕くして。」と、年重なるがいひて、開きし重詰の中に、櫻の古葉ほろ〳〵こぼれて、物語の花も咲き面白う候ひしが、ふと心づきて、山添道を一列になりての駈けくらべ、病後の身の腰をおされ手を引かれ、やう〳〵人々に追ひつき、時間にまにあひ、汽車に乘込みし時の苦しさうれしさ、これも頭に殘り居り候。都に歸り候ては、茸狩などと打連れての遠出はおもひもよらず、いつも〳〵今頃になり候時は思ひ出でて、かういふ事もありし、あの時の連はいかになりしかと、獨り樂しみ居り候。遊ぶによき此の頃を、山にも湖にも近き御わたりには、御子樣御連れ遊ばしての御そゞろありきに、いよ〳〵御健やかに肥えさせ給ふらんと羨ましく候。

竹生島　琵琶湖の北部東淺井郡竹生島村に屬す、形菱實に似、南北に長く約廿一町あり。

琵琶湖　東西六里、南北十七里、周回約七十四里、別名鳰の海。

高桑文子　文學士高桑駒吉の妻、歌文を善くす。

母・妹の竹生島に御案内頂き、「よき景色なりし。」と、時々其の折の話伺ひ候毎に、まだ知らぬ御地の懷かしう、琵琶湖を見渡す御住居、一度は訪ひ參らせ度と思ひ候も、家庭の人となりては、旅歩きもなしをられず、夢に見るのみとなり候。一言御禮申上度と筆とりしに、よしなき思出に長くなり候事、御許し下され度候。秋の空變り易く、日に〳〵寒さも加はり候頃、御自愛の程祈上候。かしこ。（高桑文子著「現代女子消息文」）

八　秋日和

一　菊日記

十月二十日。朝まだきに起きて庭に出づれば、日頃父上の

丹精をこめ給ひし花壇の菊、白色なるが半ば綻ぶ。たゞ一つなれど薫たかし。げに心地よき朝なり。

同二十一日。綻びそむる花の數いよ〳〵増しぬ。

同二十四日。清き香は庭に滿ち、枝もたわゝに咲きいでぬ。秋の千草の數はあれど、色に香にさては姿に、此の花ばかり優れて麗はしくも亦氣高きはあらじ。

同二十六日。隣の久子様訪れられ、「かくも菊花の盛りならんとは思はざりしよ。」とて喜び給ふ。かくて共に花を賞しつゝ、幼き頃校庭の菊花を手折りて髪に挿し、師の君に叱られし事など語り合ひ、夕方花を持ちて歸り給ふ。

同二十七日。茸狩らんとて、幼き妹と二人家を出づ。絶えては續く小徑を辿り行くに、茅屋の片ほとり、荒れはてし籬のもと、ふとく小さき花咲出でて、撓めず作らぬ自然の趣、たとへん物もなくゆかし。

同二十八日。外に出でし妹の、野に遊びたりとて、黄なる野菊を持歸りぬ。花壇の花には比ぶべくもあらねど、小さき瓣の愛らしく、紫匂ふ幕引きまはして、野趣のゆたかなるも却りて嬉し。

同二十九日。東都なる友より、菊花の繪葉書にて、「御あたりの香いかならん、その千代こめたるめでたさ、少しなりとも漏らし給へや。」と言越させ給ふ。返しには、白菊一輪卷きこめて參らせぬ。願はくは、君が御手に披かれんまで、かをり

消えざれ。

同三十日。　白きも、黄なるも、眞紅なるも、ともに眞盛りなり。あゝ、さても清き薫、氣高き姿、菊花のほとりに立ちて、暫しは我を忘れぬ。

同三十一日。　今日は天長節祝日。　生花の料にと庭に出づれば、露をおびたる風情ひとしほなり。　最も枝ぶりよきを擇びて、四五本剪る。　けふのよき日に人手借らんよりもと、おぼつかなげにも自ら生けたり。　面はゆる心地はすれど、またうれし。（「現代記事文」に據る）

二　小春日記

十一月三日。　野外を散歩す。　日暖かにして小春の季節なり。　櫨紅葉は半ば散りて半ば枝に殘りたる、風吹く毎に閃き飛ぶ。　海近き河口に至る。　潮退きて洲あらはれ、鳥の群飛びめぐる。　水門を下る童子あり。　向岸に舟を渡さんとて、舷に腰かけて潮の來るを待つ若者あり。　背低き櫨、堤の上に立ちて濱風に吹かれ、紅の葉ごとに光を放つ。　野末はるかに百舌鳥のあわたゞしく鳴くが聞ゆ。　純白の裏羽を日に耀かし、鋭く羽風を切つて飛ぶは魚鷹なり。　その昔は小さき島なりしが、今は丘となりて、その麓には林をめぐらし、山鳩の栖處にふさはしきがあり。　その片蔭に、家數二十には足らぬ小村あり。　濱風の衝に當りて野を控ふ。

同二十二日。　夜、月の光わづかに照りそめし頃、河岸に出づ。

村々の人既に舟と共に散じて、晝間の喧しきに似ず、いと寂びたり。白馬一疋繫ぎあり。忽ち馬子來り、牽ゐて石段を降り、渡船に乘らんとす。馬懼れて乘らず。二三の人、船と岸とに在つて、默して之を見る。馬漸く船に乘りぬ。船、河の中流に出づれば、山の端を離れてさえ〴〵と照る月の光、あざやかに映りて馬白く、人と船と共に黑し。幾百年の昔を眼前に見るこゝちして、一種の悲みを覺ゆ。船廻りし時、われもまた乘りて渡る。中流より石段の方を望めば、理髮所の燈火赤く四圍の闇を隈どり、そが前を少女の群ゆきつ返りつして、子守唄の節あはすが聞ゆ。

同二十六日。午後、隧道の前を左に小徑をきり、坂を越ゆれば、一軒の農家山の麓に在り。一人の男、一人の女、二人の少女、麥の肥料を丸め居たり。少年あり、藁を重ねし間より頭を出して、四人の者の餘念なく仕事するを、餘念なく眺め居たり。わたしを渡りて廣き野に出づ。野は麥まきに忙がしく、女子皆男子と共に働き居たり。

山の麓に見ゆる一村あり。谷迫りて一寰區をなし、ことさらに世と離れて立つが如し。かつて山の頂より遠くこの村を望み、炊煙の起ちのぼるを見て、何となき懷かしさを感ぜしことありき。村のちかづくにつれて、農夫ら多く野に在るが見ゆ。靜けき村なるかな。小兒の群の嬉戲せるに遇ひぬ。馬高く嘶くを聞きぬ。されど一村寂然たり。我

は古き物語の村に入るが如きこゝちせり。若者一人、庭前にて何事をか爲せるを見る。礫多き路に沿ひたる井戸の傍に少女あり。水涸れし小川の岸に、幾株の老梅並び立てり。柿の實星の如く、この梅樹の際より現はる。紅葉火の如く燃えて、一叢の竹林をてらす。ます〳〵奥深くわけ入れば村窮まりて、たゞ溪流の、樹木の蔭より走り出づるあるのみ。歸路夕陽野に滿つ。（國木田獨歩）

國木田獨歩　名は哲夫、小説家、千葉縣の人、明治四十一年歿、年三十八。

九　猫板俳諧

沼波瓊音

良人はまだ歸らぬ、晩の支度はもうすつかり出來て居る、暫くの暇を長火鉢に對する。時候が大分暖くなつた。日のさし具合が變つて來て、此の頃は入日の頃になると、丁度時計にまともにあたつて、振子が動く毎に、きら〳〵と眩しく光る。句が出來る。そこで猫板の上で書きつける。

春の夕日あたる時計の振子かな

夕方お湯をたてることになつて居る。寒い頃はなか〳〵沸かなかつたが、近頃は半分位の時間で沸くやうになつた。よい心持である。春らしい朧月が、丁度お湯の沸く頃に、浴室の摺硝子や庭の木立に、瑪瑙のやうな光を投げる。昨夜それを面白いと思つた。今夜もさうであらう。句が出來る。例の猫板の上で書きつける。

早く沸く風呂の嬉しや朧月

簞笥を見る、いつからか鐶が一つ取れたまゝになつて居る。秋風の身にしむ頃、これがひどく氣になつてわびしい感を與へる。句にして見る。

秋の風鐶の取れたる簞笥かな

俳句といふものはむづかしいものでも何でもない。普通の詞遣ひを知つて居れば、誰でも出來るものである。歌は婦女の間に盛に習はれて居るのに、俳句をやる女の方が、近頃は甚だ少ないのはどういふものであらう。秋色である*とか、捨女*であるとか、園女*・多代*・智月*・千代*などと云ふのは、何れも昔の女流俳人であつて、優に男子の俳人と肩を併べて居る。女が俳句を作り得るといふ事は、斯く事實が證明して居る。併し自分の部屋に閉籠つて、子供が泣いても構はず句三昧に入れといふのではない、ほんの長火鉢前の休息時間を利用して、日常の出來事や、ふと浮ぶ感想を、其の儘俳句にして、自らも樂しみ、他をも樂しませるといふ風にありたいと望むのである。

秋色　名は秋、江戸の俳人、其角に學ぶ。

捨女　姓は田、丹波柏原の人、和歌・俳諧を善くす。

園女　伊勢松坂の祠官渡會氏の女、和歌・俳諧に巧なり。芭蕉の門に遊ぶ。

多代　姓は市原、岩代須賀川の人、俳諧を善くす。

智月　近江大津の人、蕉門に學ぶ。

千代　加賀松任の人、繪をも善くせり。

大塚楠緒子　文學博士大塚保治の先妻、文章家として名あり。又繪畫をよくせり。明治四十三年十一月歿、年三十六。

故大塚楠緒子*は女流小説家であつた。可なり長い物も書かれ、また屢作を世間に出された。良人あり、子あり、隨分多人數の家庭の主婦であつて、よくこれだけの作が出來ることと、いつか御目にかゝつた時に訊いて見たことがあつた。「私は机にむかつて書くのではありません、暇のある毎に、火鉢の猫板の上で書くのです。」とは、夫人の答であつた。猫板

の上で長い小説でも書かうと思へば書ける。短い詩の俳句がこの流で出來ぬ筈はない。

男の見る世界と、女の見る世界とは違ふ。男がいくら威張つても、女の觀察といふものを眞似ることは出來ぬ。萬人の男が或題目で句を作つても、そこに一人の女が現はれて、その同題目で句作したならば、必ず萬人の男の思ひも寄らぬ趣を捕へ得るであらう。

女の大なる義務は實に育兒である。育兒を人に任せて、他の事業に骨を折る婦人は私は賞め得ぬ。育兒は婦人の光榮ある天職である。それで婦人は、子供をば男よりももつと精細に觀察する位置にある。子供の言行といふものは、

非常に面白いものである。

畑うちや子が這ひあるく土筆原
たのもしやてんつるてんの初袷
明月を取つてくれろと泣く子哉

これ等は一茶*の句である。一茶は子供をよく句にした俳人である。婦人にして子供の句を作るといふことは、非常に容易な事で、又新しい細かい句がいくらも出來ることであらうと思ふ。

ゆづり葉の莖も紅さすあした哉　園女

赤いと云ふことを、紅さすと云ひなした所に、女らしいところがある。

一茶　小林氏、信濃國の俳人、通稱彌太郎、俳諧寺一茶と號す。文政十年歿、年六十五。

芳樹　村田多勢子、春海の養女、薙髪して芳樹尼といふ。

とめ　京師の人凡兆の妻なり。

とよ　元祿時代、近江の人。

笄の中や住みよきかくれ羽子　新女

これも一寸男には思ひつかぬ所である。

鶯や手もと休めんながしもと　智月

女の日常生活を直ちに句にしてある。

風ながら衣に染めたき柳かな　芳樹

たゞ其の様を賞するに止まらず、進んで衣に染めたしと願ふが女である。

我が子なら供にはやらじ夜の雪　とめ

これもよく人口に膾炙して居る句で、言ひ方も想も女の特質を發揮して居る。

男ならひと夜寝て見ん春の山　とよ

丹野母　丹野は能役者にて大津の人俳諧を芭蕉に學ぶ、其の母の傳は不詳。

自分が男なら斯うもしようと云ふ、これも一つの妙趣で、男が聞いても特別の面白みを感ずる。

あたらしう子を思はばや花の春　丹野母

母の愛がよく出てゐる。花の春は花盛りのことではなく、新年の事である。歳こゝに新たなり、更に新しき愛を以て我が子に對せんとの情、氣高き母の情である。（此一節）

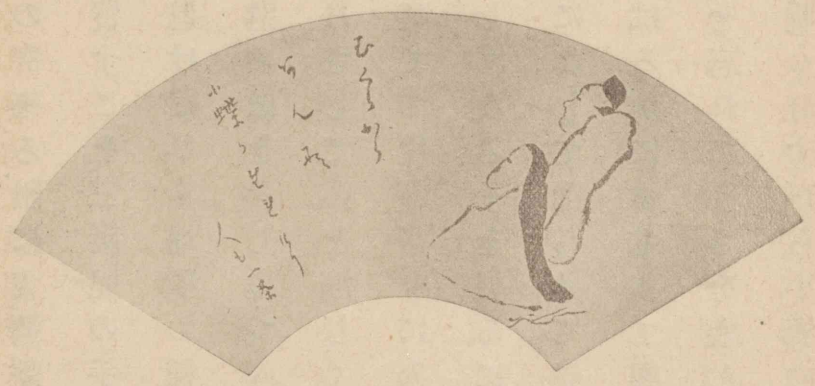
一〇　をさな兒

小林一茶

こぞの夏、竹植うる日の頃、うきふししげきうき世に生れたる女、物にさとかれとて、名を「さと」とよぶ。ことし誕生日祝ふ頃ほひより、手うち〳〵、あはゝ、あたまてん〳〵、かぶりか

ぶりふりながら、同じき子供の風車といふもの持てるを、頻りに欲しがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、つゆほどの執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子のうす紙をめり〳〵むしるに、「よくした、よくした。」と譽むれば、誠とおもひ、きやら〳〵と笑ひてひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なか〳〵心の皺を伸ばしぬ。

また人の來て、「わん〳〵はどこに。」といへば、犬に指さし、「かあかあは。」と問へば、烏に指さすさま、口元より爪先まで愛敬こ



小林一茶筆

ぼれてあいらしく、言はゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺え侍る。此のをさな兒、佛の守し給ひけん、逮夜の夕暮に、持佛堂に蠟燭照らして、鉦打鳴せば、どこに居ても急がはしく這ひよりて、早蕨の小さき手を合せて「なんむ〳〵。」と唱ふる聲しをらしく、ゆかしくなつかしく殊勝なり。

それにつけても、「おのれ頭にはいくらの霜を戴き、顏にはしば〳〵の浪

の寄來る齡にて、彌陀たのむすべも知らで、うか〳〵月日を費すこそ、三歳兒の手前も恥づかしけれ。」と思ふも、其の座を退けば、早く地獄の種を蒔きて、膝にむらがる蠅を惡み、膳を巡る蚊をそしりつゝ、剩へ佛の戒めし酒を飲む折から、門に月さしていと涼しく、外に童の踊の聲のすれば、直ちに椀投棄てて、片ゐざりにゐざり出でて、聲を揚げ手眞似してうれしげなる子を見るにつけつゝ、「いつしか彼をも振分髪の丈になして、踊らせて見たらんには、二十五菩薩の管絃よりもはるかにまさりて興あるわざならん。」と、我が身につもる老を忘れて、うさをなん晴らしける。

斯く、日すがら小鹿の角の束の間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び勞るゝものから、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり、母は正月と思ひ、飯焚き、そこら掃きかたづけて、團扇ひら〳〵と汗をさまして、閨に泣聲するを目の覺むる相圖と定め、手かしこくも抱き起して、裏の畠に尿やりて、乳房あてがへば、すはゝ〳〵と吸ひながら、胸のあたりをうちたゝきて、にこ〳〵笑顔つくるに、母は長々胎内の苦も、日々しめしの穢はしきも、ほと〳〵忘れて、手のうちの玉を得たるやうに撫でさすりて、一人よろこぶありさまなりけらし。

蚤のあと數へながらに添乳かな　（一茶全集）

一一　勝重妻と謀る

新井白石

新井白石　名は君美、江戸の人、六代將軍家宣の儒官となる、享保十年卒す、年六十九。

天正十六年、*徳川殿、*駿河の國府に移り住ませ給ふに至つて、多くの御家人の中を擇び給ひ、*勝重もて此の處の町奉行に任ぜらる。

徳川殿　徳川家康。
駿河の國府　今の靜岡市。
勝重　板倉氏、徳川譜代の臣、三河の人、京都所司代となり、良吏の名高し。

初、勝重を召され、此の職のこと仰せ下されしが、其の職に堪へざる由を固く辭し申しけれども、さらに御許しなし。勝重「さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものと謀りてこそ、御返事をば申すべけれ。」と申す。徳川殿笑はせたまひて、「さもありなん。罷り歸りて相謀れ。」と仰せくださる。妻は、勝重がかへるをむかへて、「悦ぶべきことありと告知らする人あり。如何なる幸か候。」と云ひけるに、勝重ものをも言はずほくそゑみて、衣裳ぬぎ棄て座になほり、妻にうち向ひ、「されば今日

召されしこと、餘の儀にあらず。此の度、御座所を移さるゝに依つて、かの町の奉行たるべき由を仰せ下さる。如何にもかなふべからざる旨を辭し申せども、御許しなし。『さらばわが家にかへり、妻に謀り候はん』と申してまかり歸りぬ。さて、御事は如何にか思ふ。」といふ。妻は大いに驚きて、「あなさ淺ましし。私事などならば、『夫婦議る。』といふこともこそあれ。公にてかゝることや宣ふべき。ましてこれは仰せ下さる所なり。殊に其の職に堪へん堪へじは、御心にこそあるべけれ。みづからいかで知り候べき。」といへば、勝重「いやいや、われ此の職に堪へん堪へじは、わが心ひとつのみにあらず、御身の心に因ることにてはべるぞ。まづ心を靜めてよ

く聞かれよ。古より今に至り、異國にも、本朝にも、奉行・頭人（コウラヒト）などと言はるゝ者の、其の身を失ひ、其の家を亡さぬは稀なり。或は內緣に就いて、訴を斷ること公ならず。或は賄賂に因つて、理を判つこと私多し。これらの災は婦人よりおこる所なり。われ若し此の職承らん後は、親しき人の言ひよらんことなりとも、訴訟のこと執り給ふまじきか、苞苴（オクリニツ）の受け給ふまじきか。これらのことを始めとして、おこことは、勝重の身の上、如何なる不思議のことありとも、さし出でて物宣ふまじき由、固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずることは、如何にも叶ふべからず。さればこそ『御身と謀るべし。』と申したれ。」といふ。

妻つくゞうち聞きて、「誠にのたまふ所ことわりにこそ侍れ。みづからは如何なる誓をも立てなん。疾く參りて受けさせたまへ。」といふ。勝重大いに悅びて、神にかけ佛にかけて、固き誓立てさせて、「この上は思ひ置くことなし。さらばまゐらん。」とて、衣裳ひきつくろうて出づるに、袴の後嬰をもぢりて着たり。妻うしろざまに見て、「袴の後あしう候。」といひて、立寄りてなほさんとす。勝重聞きもあへず、「さればこそ『わが妻に謀らん。』と申しし、過たざりけれ。勝重が身の上のこと、如何なる不思議ありとも、さし出でて物いはじと誓ひしは、今のほどぞかし。はやくも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重、職承ることかなふべからず。」とて、また

衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、ふかくわびければ、「さらば其の言葉、いつまでも忘れ給ふな。」といひて、御前に參る。徳川殿、「如何に、汝が妻は何とか云ひし。」と仰せければ、「妻にて候ものが、慎みて承れと申し侍り。」と申す。「さこそはあらめ。」とて、大いに笑はせ給ひきとなり。（落穂譜）

一二　赤十字社

古の戰爭は、概ね敵を殺すを以て主要なる目的としたりしかど、近年に至りては、戰爭の術大いに進歩して、たゞ敵に戰ふべき力を失はしめんことを務め、捕虜の如きも、既に抗敵の心なきものは鄭重に待遇して、妄りにこれを殺すがごと

千八百五十年　我が孝明天皇の嘉永三年に當る。

クリム戰爭　千八百五十三年露土開戰するや五十四年英佛二國は土耳古を助けて露國と戰ふ。

ソルフェリノ　伊太利マンツア州の村落。

きことなし。ことに文明の諸國には、各〻赤十字社と稱するものありて、互に條約を結び、若しこれに加盟せる二國、戰端を開く事ありとも、負傷兵及び病兵に對しては、彼我ともに之を救護すべき規定なり。されば、甲國の軍勢、乙國の病院を圍むことありとも、赤十字の標章あるを見る時は、決してこれを捕獲することを得ざるなり。

赤十字社は、西暦千八百五十餘年、クリム戰爭の時、英國の婦人ナイチンゲールが奮ひて戰地に赴き、負傷兵または病兵の看護に從事したるに萌ししが、後又千八百五十九年、ソルフェリノの大戰に、墺・佛・伊三國の兵數十萬、伊太利の原野にて、連日連夜苦戰せし時、瑞西國のアンリー、デュナンといふ

人、親しく戰地に赴きて、負傷者等が困苦の慘狀を目擊し、直ちに一書を著して、世人の注意を促したるより、有志の人々、瑞西國ゼネヴァ府に會し、此處に一社を設けて、戰爭に於ける傷病者の救護手段を議することとなれり。是實に赤十字社の濫觴ともいふべきものなり。赤十字社の名は、其の會盟地たる瑞西國の國旗に因みて、白地に赤十字の徽章を用ひしに由るなり。後千八百六十三年、卽ち我が文久三年、終に廣く各國の同志者を招きて、ゼネヴァ條約を締結し、此の地に萬國赤十字中央部を置きて、各國の諸社と互に連絡を通じ、其の基礎ますゝ鞏固となるに至れり。

我が邦にても、明治十年、西南の戰爭に際し、傷病者を救護す

ゼネヴァ　瑞西最西端ゼネヴァ州の都府、ゼネヴァ湖畔にあり。

ゼネヴァ條約　赤十字社條約ともいふ。戰地の病院・病者・傷者・運搬人・醫員・看護人・說敎者等を戰鬪の暴力以外に置くべきことを定む

る目的を以て、博愛社を組織せしが、亂平ぎて後も、これを永久常設の一社とし、一朝事ある時、救護のことに從はんことを期したりき。然るに明治十九年、我が政府、ゼネヴァ條約に加盟せしを以て、此の社は政府の認可を得、日本赤十字社と改名して、萬國赤十字中央部と交通を開き、天皇・皇后兩陛下の御保護の下に、專ら報國・恤兵の事を掌り、旁〻天災地變の際に、傷病者の救護を務むるに至れり。

日淸戰爭に際して、此の社が一般に軍人・軍屬の救護事業に盡力せしは勿論、特に淸國は未だ此の條約に加盟せざるのみならず、淸兵の我が負傷兵を待つこと、殘忍・酷虐を極めたりしに、我が赤十字社衞生部員は、彼の傷病兵を遇すること、

少しも我が傷病兵と異なることなかりければ、彼等は皆叩頭感泣して、我の仁惠を拜謝したりといふ。また近く日露の大戰役に際して、我が赤十字社の活動の目覺しかりしは、普く世人の熟知せる所にして、我が陸海軍の名譽と共に、相並びて邦人の美德を世界に發揚せしこと鮮少ならず。今も猶萬國の讃稱して措かざる所なり。（「國語漢文教程」に據る）

一三　ナイチンゲールその一

徳富蘆花

徳富蘆花　名は健次郎、熊本の人、蘇峰の弟、文章小說をよくす

歐洲の公園地ともいふべき伊太利の、風光明媚なる一都府をフロレンス*と稱す。今を距ること九十餘年前、ナイチンゲールといふ英國の一紳士、遊歷の途次、夫人と共に、こゝにフロレンス　伊太利の北部にある都會、アルノ河に臨み風光絶佳。

しばらく逗留して、一女兒を擧げたり。フロレンスにて生れたればとて、やがてフロレンス、ナイチンゲールと名づけぬ。これなん、歷史に一光彩を添へて、萬人に祝福せらるゝ名なりける。

ナイチンゲール家は、教育あり財產ある紳士の家にして、隨つてフロレンス女史も、豐かなる家庭に何の心配もなく生ひたち、古文辭・數學・語學等、其の頃の女子としては、周到なる教育を受けたり。

然るに女史天性慈悲の心深く、六七歲の頃より、人形の介抱、犬猫の療治等を遊戲とし、知己・朋友の中、又は我が家に屬する小作人・僕婢の中に疾病者ある毎に、常に往きてこれを慰

め、楓の如き小さき手を以て、さま〴〵に介抱したりき。少しく長じては、其の家に近き鉛鑛山・石切場等の役夫の怪我を介抱・療治するに、彼等皆涙を流して感謝しあへり。

ナイチンゲール

さる程に、女史は遍く世の苦痛者・疾病者の友たらんと志し、まづ英國各所の病院を訪ひ、千八百四十四年、更に歐洲諸國遊歷の途に就き、各國の病院及び看護制度を仔細に觀察すること、殆ど十年に及べり。

千八百五十一年には、一看護婦となりて、ライン河畔のカイゼルウェルトの病院に入り、當時歐洲隨一の看護法の達人

ライン河　源を瑞西に發し獨逸を流れ和蘭に入り海に注ぐ。

と評せられし同病院看護長に就きて、一年の間、非常の勉強を以て其の業に從ひ、尋いで獨逸・伊太利・佛蘭西等を遍歷し、英國に歸りて倫敦の一病院を整理せり。此の十年間は、女史が修練・準備の時代なりき。

仔細　細　仔細

準備の後に實行あり。今や大いに十年の修練の能力を發揚すべき時は來りぬ。東歐のクリム戰爭即ち是なり。クリム戰爭は、露西亞が弱小なる土耳古を凌ぎて南下せんとせしを、英佛の二邦が、土耳古を扶けて露國を抑へんとしたる戰爭にして、千八百五十四年の春に起れり。

クリム戰

此の戰爭の始に於て、英・佛の聯合軍は著しき武勇の働をなしが、運送不便・監督不行屆のため、糧食缺乏し、加ふるに陣

營の衞生具はらず、食なく、衣なく、薪なく、適當なる病院・看護者なきが爲に、健康なる者は病み、病みたる者は死し、陣中は一大疫病窟となりぬ。　戰に臨んでは勇んで大砲の口に立つ勇士も、片端より蠅の如くに斃れぬ。

歷史の記す所によれば、クリム戰爭の死亡者二萬六百五十六人中、戰死者は僅かに二千五百九十八人にして、一萬八千五十八人は、實に病院に斃れたる者なり。　或は一大隊悉く死亡せるものあり。　或は一大隊の中、僅かに七名の健康者を剩せるものあり。　病者・傷者を運搬するに、四人の中一人は必ず死し、手足の截斷を行へる傷者の中、五分の四は歿せり。　クリム戰爭の初、七箇月の間に死亡せる兵士の數は、實に夥しきものにして、若し此の割合にて進まば、征討の全軍は、一年半にして全く死につくすべき有樣なりき。　是等の事實英國に聞ゆるや、國民の悲憤・羞恥は限りなく、皆東方の天を望んで、涙を流し胸を痛めたり。　クリムの慘報は、英國三千萬人の心臟を鼓動せしめたり。　彼等は皆徒らに救濟を叫べり。　而して爲すべき道を知らざりき。

此の時に當りて、最も胸を痛めし人、此の慘澹たる報導に因つて、自己の職分を悟りし人は、忽然として暗黑の裏より起ち、時の陸軍大臣に一通の書を寄せて、自らクリムに赴き、病院整理・衞生監督の任に當らんことを申し出でぬ。

心は心といかに相響くものぞ。　ナイチンゲール女史が陸

軍大臣に宛てて、クリムに出張せんことを願ひ出でたる書狀は、大臣がナイチンゲール女史にクリム出張を依頼せる書狀と、恰も途中にて行違ひぬ。女史はこゝに其の志望に背かず、クリムに於ける病院・衞生に關する全權を與へられたり。時は來れり。許可は已に下りぬ。準備は已に整へり。女史は四十二名の篤志なる婦人と共に、白帽・白衣、故國に別れ、直ちにクリムに向ひて出發せり。

コンスタンチノプル　歐羅巴トルコの首府。

一四　ナイチンゲールその二

十一月十四日、ナイチンゲール女史以下四十二名の婦人は、*コンスタンチノプルに着しぬ。當時英軍の病院は、コンスタンチノプルと一衣帶水をへだてたる*スクタリにありき。女史が四十二名の婦人を從へて此處に着するや、恰も女史の決心と手練とを試みんためなるかのごとく、*インケルマンの大戰爭其の翌日を以て行はれ、輕重傷者は雲のごとく送り越されたり。病院は已に二千三百名の傷病患者を入れたりければ、此の一戰の負傷者を合せて、入院者の數は、實に人をして愕然措置を失はしむべきものなりき。然るにナイチンゲール女史および其の一行は、素より覺悟のことなれば、いさゝかも驚きさわぐ氣色なく、靜かに其の事業に取りかゝりぬ。

スクタリ　亞細亞トルコの都府。

インケルマン　クリムの都府

冬は來れり。寒氣指を墜す冬は來れり。戰は益〻劇しく、手

貧の數は益〻加はり來れり。　到着後、多くの月を經ずして、ナイチンゲール女史の看護の下に來りし患者の數は、實に一萬に餘り、スクタリの戰地病院のみにても、其の間二呎六吋を隔て列べし病床は、長さ二哩三分の一に亙れり。

此の莫大なる患者を引受けし女史の勞、果して如何。　女史は實に其の身體の虛弱なるにも關せず、部下の看護婦を指揮し、院內を巡視し、二十時間餘も立ちつゞけたることありき。　天使の如く柔和なる仁德の光と、金鐵の如く堅硬なる意思の力とを以て、冱寒の冬と戰ひ、運搬の不便と戰ひ、大混亂・大錯雜と戰ひ、斯くして呻吟・怒罵・汚穢・饑餓・惡疫を以て充ち滿ちたる戰地病院は、月を出でずして、淸潔にして秩序整ひたる、あつぱれ文明國の假病院に慙ぢざるものとなりぬ。

ナイチンゲール女史は實に纖弱なる一婦人に過ぎざれども、幾十百の荒くれ男は、小兒の如く其の言を聞けり。　彼等は女史が彼等の爲に盡さんとて、富家の安逸を捨て、故鄕の快樂を棄て、あらゆるものを打棄てて、寒氣・砲煙・鮮血・疾病をも厭はず、此の戰地に來れるを知れり。　其の獻身的精神の光輝は、實に女史が眼に、唇に、言語に、擧動に、渾身に輝き渡り、彼等をして歎美・敬慕措く能はざらしめたり。

嗚呼、光明の入る所、暗黑は直ちに影を收む。　ナイチンゲール女史來つて、スクタリの病院は聖會堂の如くなれり。　時としては、兵士が外科の手術を受くるを拒みて、言爭ふ事あ

れども、女史來つて其の床邊に立ち、溫言以て諭すこと三四語、乃ち彼は默して其の手術を甘受せり。

「かの女の來るまでは、咒詛・罵詈の聲劇しかりき。彼の女來りしより、病院は尊き寺院の如くなりぬ。」とは、これ院内の一兵士の、人に語りし所なり。「かの女は彼方此方に向ひて語り、又更に幾多の者に向つて微笑を與ふれども、かの女は一同に向ひてかくする能はず。吾等はかの女の過行く姿をだに見れば、滿足して枕に就けり。」とは、これ他の一兵士の、陸軍大臣に語れる所なり。

千八百五十五年の春、野戰病院の看護部を組織せる際、女史は久しき勞働の結果として熱病に罹りしが、更に歸國するを肯んぜず。纔かに癒ゆるや、直ちにスクタリの病院に出勤して、千八百五十六年七月、英軍土耳古を引拂ふまでは、遂に其の場に蹈みとゞまりぬ。女史の戰地にある、前後殆ど二年に近かりき。

女史の英國に歸るや、婦人としては未曾有の大歡迎を受け、上は女皇より、下は倫敦裏小路の下等勞役者に至るまで、全國民は爭うてこれを祝福したり。

女皇は感謝の手書と金剛石を嵌せる十字架とを賜ひ、土耳古帝も亦寶石を鏤めたる腕環を贈り、有志者は義捐金五萬磅を醵めて之を贈れり。其の他、有志者より寄せたる物品・謝狀は山をなして、枚擧するに遑あらず。而して女史は此

の五萬磅の金を以て、*セントトーマス其の他の病院に寄附して、看護婦養成の資に供しぬ。

女史は實にクリム戰爭に於て、萬餘の生命を救ひたるのみならず、光明の模範を永く後世に傳へしのみならず、戰爭以後五十年、また實に有益なる生涯を送りぬ。いはゆる赤十字社の起れるは、實に女史の指導に由れるなり。（「名婦鑑」に據る）

セントトーマス　ロンドンにある病院。

外山正一　舊幕臣、文學博士、大學總長・文部大臣・貴族院議員たり、明治三十三年歿、年五十七。

一五　忘れがたみ

外*山正一

實に人ははかなきものなり。今日の夜はまだ過去らざるに、ひたすらに明日・明後日の事にのみとかく心を移しがちに、如何なる天の災がすぐ眼前に迫ればとて、「一寸先は闇」の譬、明日ともいはず、今宵のうちに深き淵に陷る身とはつゆ知らずして、百年の計をなすこそあはれなれ。

風なく、雨なく、いと靜かなりし冬の夜は、忽ちにして奈落の底を見るに至れり。

泣く者も、笑ふ者も、喜ぶ者も、怒れる者も、舞ふ者も、唄ふ者も、樂しむ者も、悲しむ者も、均しく一度に聞きたるは、地底に起りし、大山の崩るゝばかりの響なりけり。

すさまじき勢にて、大地は下より突きあげられ、地上はさながら激浪の打つが如くに震ひ動けり。

*安政二年十月二日時刻は夜の亥*の刻かとよ。地裂け天墜つるかと驚かれたり。

安政二年　孝明天皇の御代。（一八五五）

亥の刻　午後十時。

見る〳〵百萬の人家・倉庫・神社・佛閣、倒るゝあり、崩るゝあり。家にしかれ、瓦にうたれて、死せるもの幾許なるかを知らず。一時に落來る千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣叫ぶ老若・男女の聲に和して、たとへんかたもあらざりけり。暫くにして、地の震やゝをさまり、崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ、あとに殘りて聞えしは、親を呼ぶ子の聲なりけり、子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも、遠くにも、殊にあはれに聞えしは、次第々々に細くなる「助けてくれ、助けてくれ。」の聲なりけり。

理りなるかな、梁に壓さるゝ者あり、柱に挾まるゝ者あり、土に埋もるゝあり、壁にしかるゝありて、さなきだに苦しむ者は多かりしに、地の震ひ動くこと、いまだ止まざるに、四方の天地は、一面に次第々々にあかるくなりて、さながら晝の如くになりしは、處々方々の潰家より炎々と火燃出で、焰の天を焦がせるなりけり。

梁に壓されて身は動かず、悶え苦しむ其の處に、燃來る火のために、煙に咽び、熱さに耐へかね、遁れんとしてあせれども、遁るゝことかなはねば、聲を限りに叫べども、助けに來る人はなく、無間の地獄、修羅の巷、無慚といふもあまりあり。

此の夜わづかの時の間に、死したる人の數は幾萬なるかを知らざるが、中にはいとも哀れなる死樣の者も多かりけり。運强くして、不思議にも其の身は萬死を遁れしかど、親・兄弟

の無慚の死を、そゞろに悲しむものもありけり。

是等は人の身の上なり。われにも此の夜の話あり。父は此の夜は宿直の番にて、家に在らず。家を守り、三人の子を護りしは母なりけるが、上なる子二人は母の左右に寢ね、末なるは乳母に抱かれて、枕邊に臥し居たりき。

あるまじき事なれども、「すは、地震よ。」といふとひとしく、乳母は抱きし子を捨てて、我のみ外へと逃出でたり。

母は啼く子を抱きあげ、右と左に寢ねたる子をゆり起さんとあせりしかど、稚子をかゝへし身にて、大浪にゆらるゝ如く動きつゝ、片手に起す左右の子は、冬の夜の寢入りばなにて、起せども〳〵いつかな〳〵起きばこそ。うつゝにて母

水地　本所深川あたりの低地の稱

に連れられて外へ出でたる其の時は、地のゆるゝもやみしあとにて、四方の天は火事のために既に眞赤になり居たり。

實に危かりしはわれ〳〵親子の命なりけり。そも安政の地震には、水地なる舊家の潰れぬものは稀なりしが、われ等が住ひしふる家も、潰れんばかりに傾きたり。

今に於て想ひ起すも、身の毛のよだつは此の夜のことなり。

此の地震にて、われ等が家のもしや潰れもしたらんには、我が兄弟は死したりとも、誰をも恨むべきならねども、若し母が死したらんには、われ等が罪にてありしならん。

さりながら此の夜若しわれ等親子が死したらば、何故母が死せしかは、世に知る人はなかりしならん。生くべかりし

を、子の爲に死せりとは誰か知るべき。今もなほ忘れざるは、久しき昔の此の夜のことなり。

實にありがたきものは母の愛なり。母は其の身の危きをも顧みずして、一心に子を助けんと爲しつるなり。實に深きは親の恩なり。われに今日あるは、かゝる愛を以て育てられたる母ありしがためなり。われは自ら知らざれども、我が母が此の夜のごとくに、其の身の危きをも顧みずして、われ〳〵の身をば護りくれたるは、幾たびなりしか知れざるならん。

此の夜の事は、亡き母の、われには忘れがたみなり。此の夜われ〳〵親子よりも運拙くして死せる者には、助かるべき

吉江孤雁　信濃の人、名は喬松、文章家。

を、子の故に死したる母は幾許なるらん。

此の夜の事は、亡き母の、われには忘れがたみなり。此の夜の如き天災の、若し今日の夜に起らんには、助かる命を、子の爲に棄てんとする母親は幾許なるか知られざらん。實に深きは親の恩なり、忘れ難きは親の恩なり。（外山全集）

一六　海の親み

吉江孤雁

靜かな海に臨む者の心には、一種豐かな伸びやかな感じがある。——手を上げて、我が前に横たはつてゐる大きな海を抱きたい。あのゆるやかに昇りつ降りつする波浪の上は、歩いて行つても陷る危險はあるまい。また其の波の中に

包まれて、滑かな水が肌膚の目にしみこみ、肌膚の表面を傳うて流れる快さを味はつて見たい。背を波上にのせて、何處にもあれ、其の運び行くまゝに運ばれて、仰いで空に一つ二つ浮び出る星影を數へ、遠く鳴る沖のなごみに胸をおどろかせ、ほの白い地平線の彼方へ〳〵と流れて行つたらば、どうであらうか。

親しいものは海である。冷たい暗い北の海でも、初冬の海でも、なつかしさを與へてくれる。神經纖維のみの凝固してゐるやうな病的の私の頭も、海に向つてゐる時だけが、緩く溶けてくる、少しの無理な軋みかたもないやうに思はれる、自由な波の活動、それが私の心にゆるやかさを與へてくれる。

どうッと一時に氣付いたやうに、稍〻音高く寄せて來るかと思ふ波の音が、其の頂上に達した時、引く波の勢と相對抗して、互にこらへあつてゐる時、海の面が一時しんと靜まりかへることがある。けれど此の瞬時も決して寂しくはない、物凄くもない。何物かを期待してゐる沈默。かすかなさざめきが、波の面を掠めて過ぎるかと思ふと、其の沈默が一時にどつと崩れて、賑やかな笑となる。波浪の笑、萬波の洪笑！その笑は直ちにかまびすしい談論となる。盛上つた音が崩れて平かに走る。海のおも一面から湧立つ音となる。崩れた音が盛上り、盛上つた音が崩れる。もう暗くな

つて來た海の面に、一箇處むくッと白い波が隆起したかと思ふと、つゝッと長く走つて、一聯の波が頭を昂げて、ざぶりとばかりに前へ倒れる。何處が始まりで何處が終りでもない。こけつまろびつ、躍りつ狂ひつして、波は戯れてゐる。ざあッと長く押して岸上へ打上つて來た波は、來べからざる處まで來たものの惶てた姿をして、急いで歸り去らうとする。が、歸り後れて、寂しく岩蔭に身を漂はせて潜んでゐる。後から二度寄せて來た時に乘じて、其の取殘された水は勢づいて歸つて行く。

もう波の色も形も見えなくなつた。たゞ音ばかりが四方に廣がり散じて、海面が一種の唸りと變つた。此の唸り聲の間をすかして、三四里の海上を隔てて、青森の市街の灯が、一列に波に沿うて掛連ねられたやうに見えてゐる。寂しい場處から、遠い町の灯を見るくらゐ懐かしいものはない。燈火はまた〳〵きらめいて、人を招いて居る。ぢつと其の火を見つめて居ると、或時は遠くなり、また近くなつたりして、海上にたゆたつて人の思を誘つて行く。自分のゐる室のランプの光をも、何人か闇の中から、若しくは海上から望み見て、色々な思を繫ぐ中心としてゐるかも知れない。このランプの下で、二重硝子戸の廊下へ出で、椅子へ腰をかけて、色の青ざめた痩せこけた男が、病氣で痛む頭を手で押へながら、ぢつと闇を透して、海の面を見つめて居ようなどとは、

何人にも想像のつかない事であらう。

今夜はランプの灯が波の響に搖れて、瞬くさまを見ながら、その響が自分の胸まで傳つて來て、心臟の鼓動も同じ調子を取り、血の循環も同じ昇降をなして身內を走るのを感じながら、坐つてゐることが出來る、自分の生命力を意識して、坐つてゐることが出來る。　波上におこる如何なる事件でも現象でも、みな鮮かに身內に響を及ぼして來るのを感じながら、眼を見張り、肌膚の目を開き、身體全體で呼吸して、强く生を自覺してゐることが出來る。　常は片寄つた方向に流れて居る私の活力が、今は平かな順潮となつて、自由に伸びて行くのを感ずる。　全身が刻々に燃燒し、周圍の空氣に渦紋を與へ、波動を與へて、其の活力が四方へ發展するやうに感ずる。　病氣といふことは、活力が片寄つた方向へ流れて行く形である、若しくは其の活力がいづれの方向へも流れ得ず、または流れる力を持たずに停滯してゐる形である、鬱屈してゐる姿である、澱溜してゐる有樣である。　それが平潮に歸し、自在性を緩うし、流動が思ふまゝになる時に、其の人は悅を感ずる、生々した自覺が得られる、肉體の伸びやかさと精神の晴れやかさとを感ずる。

今夜は、夢はおだやかであるに違ひない。　實際波の響ぐらゐ、人に樂しい眠を與へてくれるものはない。　絕えず生きてゐて、絕えず目醒めてゐて、私達の不安な眠を護つてゐて

くれる。「早く眠れ、早く眠れ。」波の滑かな無數の小さな手が、布團の上をたゝいて置いて、次第に遠く〳〵音を引いて、幽かに〳〵眠の中へ私達の魂を誘つて行く。どんな不眠症に罹つてゐる人でも、此の自然の子守謠に誘はれては、小兒のやうな眠に陷らずに居られるであらうか。（霧の旅）

十返舍一九　本名重田貞一、戲作者、駿府の人。（一七三九―一八一一）

彌次郎・北八　東海道の道中記をかく爲に假想せる主人公。

譽田　遠江國小笠郡東山口村八阪に在り。日阪驛の南、八幡宮は縣社。

一七　鹽井川渡り　十返舍一九

東雲まだき驛路の、忙しげにひきつるゝ朝出の馬の嘶に、旅疲の目を擦りながら、彌次郎・北八起出でて支度し、こゝを立出で、ふるみや譽田の八幡を打過ぎ、それより鹽井川と云ふ所に至りけるに、昨日の雨强くして橋落ちにけるにや、行通ふ人自ら股引を取り裾を捲上げてこゝを渉るに、彌次郎・北八も、いざや、引連れて渉りなんとする折柄、京のぼりの座頭二人連、この川の徒渉なることを聞きけるにや、一人の座頭、

犬市「モシ、川は膝ぎりも御座りますかな。」北「左樣々々、併し水が早いから、お前方ァ危い。用心して渉りなせへ。」犬市「ハア、成程水の音餘程早い。」と言ひつゝ、石をひろひ川の中へ投げこんで考へ、犬市「イヤ、此處らがどうか淺い樣だ。コリヤ、猿市、二人ながら脚袢を取るも面倒だ。おぬし若役に己をおぶつて渉れ。」猿市「ハヽヽヽヽ、ずるい事をぬかす。拳で參らう。何でも負けたものがおぶつて渉るのだ。よしか。犬市「コリヤ、面白い。サア來い。さんなむめで。」猿市「りや」

さんなむめ　りやんごうさい　右の二語は拳を打つ呼聲にて唐音の訛なり。「さん」は三、「むめ」は不詳、「りやん」は二、「ごう」は五、「な」「さい」は添語。

んごうさい、りやんごうさい。」と、片手で拳を打ちながら、兩方から左の手を出し、互に拳を打つ手をにぎり合ひ、犬市「サア、勝つたぞ、勝つたぞ。」　猿市「エヽ、いま〳〵しい。そんなら此の風呂敷包を貴樣一所に背負はつせへ。ソレ、よしか。サア來い、サア來い。」と、支度して背中を向ける。　彌次郎「是はありがたい。」と猿市におぶされば、猿市は連の犬市と心得て、さつさと川へはいり、難なく向ふへ渉ると、こなたの岸にのこりたる犬市、犬市「ヤイ、猿よ、どうする。はやく川を渉さぬか」猿市向ふの岸にて聞きつけ、猿市「コリヤ、冗談な奴だ。たつた今おぶつて渉したに、またそつちへ行つておれを嬲るな」犬市「馬鹿ア言へ。おのればかり渉つて、太い奴だ。」　猿市「イヤ、太いとはそつちの事だ。」　犬市「コリヤ、おのれ兄弟子に向つて言語道斷な。早く來て渉さぬか。」と、白い目をむき出し腹立つるゆゑ、猿市しかたなく又こちらへ渡り歸り、猿市「サア、そんならおぶさりなさろ。」と背中を出す。北八、しめたと手を掛けておぶされば、猿市またさつさと川へはいる。犬市は大いに急きこみて、犬市「コレ、猿市どこに居る。」　猿市、川の中にて、猿市「イヤ、こいつは誰だ。」と北八を川の中へどんぶり落

原著の挿畫

す。北「ヤアイ、助けてくれ、助けてくれ。」と、手足をもがき流れるゆゑ、彌次郎飛びこみ引上ぐれば、頭から骨まで腐るほど濡れ、北「エ、、座頭めがとんだ目に遇はしやァがつた。」彌「ハハ、、、、まづ着物を脱ぎやれ、絞つてやらう。」北「全體彌次さんが悪い。なんのおぶさらずとも宜いことに、お前が手本を出したから、ツィおれも。」彌「川へはまつたか、氣の毒な。ハ、、、、それで一首やらかした。

はまりけり目のなき人と侮りて
むくいは早き川のながれに。」

北「エ、、聞きたくもねへ。よしてくんな。ア、、寒い〳〵。」と裸になり、がた〳〵ふるへながら着物を絞る。此の内座頭は川を渡り行きすぎる。彌「こゝで干しても居られめいから、着替を出して着やれ。何處ぞで火を焚いて貰つて、あぶるがいゝ。」北「エ、、いま〳〵しい。風を引いた。ハアクツシャミ。」と、ぶつ〳〵小言をいひながら、着替を出して着換へながら、くさつた着物は絞つて引提げ出掛けると、ほどなく掛川の宿に至る。（東海道中膝栗毛）

掛川　静岡縣小笠郡に在り、濱松の東約八里。

池邊義象　熊本縣の人、國文をよくす、御歌寄人なり。

清水　京都洛東、清水寺のある所。

牛若　後の源義經。

今若　後の僧全成。

一八　常磐雪行　池邊義象

燈の影かすかにきらめくは、清水あたりなるべし。夜もいたくふけぬらん。犬の遠吠よりほかには聞ゆるものなし。常磐は市女笠をまぶかくかぶり、牛若を懷にいだき、今若を

乙若　後の僧義圓。

七條　京都七條通。

義朝　源爲義の長子、下野守より左馬頭となる、平治元年敗死す、年三十八。

義平　義朝の長子。

頼朝　義朝の第三子、鎌倉初代の將軍、右近衛大將・征夷大將軍たり、正治元年五月薨ず、年五十三。

前にたて、右に乙若の手をとりて行く。けさより降りつゞける雪は、今も晴れず。見慣れし溝も埋まり、橋もかくれたれど、杖とらん手もなし。志ざすところは七條わたりなり。常磐は年二十三、今若は八つ、乙若は六つ、牛若はやう〳〵二つになりぬ。あはれ、義朝は運拙くてはかなくなりぬ。再擧を圖らんとてさまよひし義平も討たれぬ。頼朝も捕はれて、「今日明日の中に斬らるべし」など聞ゆるに、常磐はたゞ心細さのみ打添ひて、泣くより外なし。比叡山おろしさえさえて、又降りしきる大雪に、笠も破れ衣も裂けて、一足だに行かん方なし。乙若は今まで寒さをこらへしも、手かゞまり足しびれて堪へがたければ、「向ひに見ゆる、棟門のわたりに休らはん。」といふ。今若そを聞きて、「汝忘れたりや、『棟門のある處は敵のすみかなり。』と、常に母上のたまひしものを。」といふ。それを聞く常磐が心いかに悲しかりけん。さきよりたび〳〵小袖を引裂きて、乙若・今若が足を裹みしも、時ふれば又やぶれて、今は兄弟が足跡血に染みて、紅梅などの雪に散りたらんが如し。そをふみ行く母が心またいかに。

辛うじてある地藏堂に出でぬ。「暫し休らはばや。」と母のいふに、二人はうれしげに石段をはらひ上る。香の煙もたえて、人里も遠きところと思へば、常磐は積る雪ども打拂ひて、二人をば嵐のどけき處にたて、我が身は烈しき方に立ちふ

さがりて、頭かき撫でつゝ、忍び〳〵に物語りす。あはれ、今懷ける子の、遂に平家を滅すべき器量あるものとは、知るや知らずや。

川千鳥のちゝと鳴く聲に夢さめたりけん、牛若はちぶさをさぐりて泣出す。母は之をとゞめて、「こゝは敵の家なり、聲をたてて泣かば、捕はれて失はれん。」とおどろかすに、乙若は幼心にいぶかしと思ひて、「今若殿、々々々、これは敵の門に候か、地藏の御門と承りしを。」などいふ。今若、「いな〳〵、こゝは清盛が家なり。乙若殿、泣きたまふな、我も泣くまじきぞ。」などいひかはす。この問答を聞く母の心ぞいかに、泣きわめく兄弟よりも、その苦しさはなか〳〵にまさりぬべし。

清盛　平忠盛の長子、從一位太政大臣に至る、養和元年薨ず、年六十四。

伏見　山城紀伊郡、淀川の左岸、京都の南二里半。

夜の明けぬ中に、伏見の里までと思へば、又氷の上をたどり行くに、稻葉山のかたほの〴〵と白みて、鷄の聲かつ〴〵きこゆ。犬なども吠ゆめり。常磐は人里も近しと思へば、殊更に野邊をたどる。曉かたの風、面も裂くるやうなり。「つめたや、母上。」とて、泣悲しむ二人が手に、息をあてなどして、やうやうに志ざすところに着きぬ。

柴の折戸にたゝずみて、しのび〳〵に聲かくれど、きこゆるよしもなし。ほと〳〵と打ちたゝけば、奥より女出できぬ。「何處よりか。」と問ふ。常磐ありのまゝに語りて、「伯母君に逢はせ給へ。」といふ。女いかに思ひけん、頰ふくらかして、「源氏の大將軍の北の方などいひし時こそ、親みも結び給ひつれ。

今は謀反人の妻子なり、あな、うるさし。かつ尋ね給ふ君は、物詣でしてゐたまはず。」といひすてて、おくへ入りぬ。常磐ははるゝと尋ねこしに、情なき人かなと思ふにも、まづこどもの上ぞおもひやらるゝ、げに人の心ばかりうたてきはなし。昨日まで何事も共にと語らひしに、腹たゝしきことかな。左馬頭の、長田の奴に討たれ給ひしことも、かゝる世の中なればなど、更に思ひ出されて、しばし泣沈む。今若この體を見て、「母上泣き給ふな。運つきては、何事もかやうに侍る。」など、慰め顔にいふも悲しき極みなりけり。常磐は落つる涙をまぎらかしつゝ、「年ごろ願ひこめし清水*觀音も、けふや見納めに侍らん、おの〳〵拜み候へ。」と、口そゝぎ、手あらひて、はるゝと伏拜む。さて再び大和路さして落行きぬ。雪はいよ〳〵降りしきるなるべし。（明治名文集）

清水觀音　京都洛東清水寺の本尊は十一面千手千眼の觀音なり。

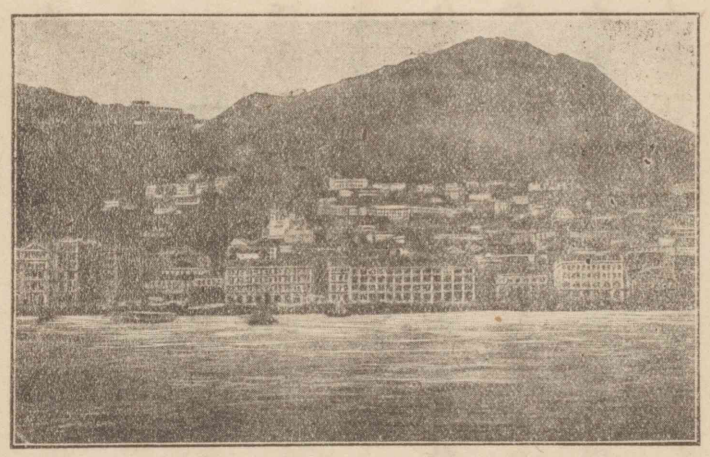
一九　香港

下*田歌子

ほの〴〵とおし明けがたの空の氣色いと艶なるほど、船窓より首さし出でて見れば、大きなる山の、わが顔をつとさしふさぎたるやうなるに驚きて、なほよく見まはせば、船ははや香港の港にかゝりたるなりけり。朝霧やう〳〵晴れわたり行く際より、綠色の峯のうるはしきが、遠く近く高く低くそびえて、山の尾には、いといかめしき煉瓦造・石造の家屋の立ちつゞき、石炭の烟の空にたなびき渡りたるに、まづ其

下田歌子　美濃岩村藩士平尾氏の女、幼名せき子、下田氏に嫁し未亡人となりてより、宮中に仕へて歌子の名を賜はる、現に私立實踐女學校を經營す。

の竈のにぎはひもしるくぞ覺えたる。



香港

朝の茶したゝめ果てて、甲板にのぼれば、いときたなげなる支那人の、衣服・調度・食物、何くれの物擔ぎつれつゝ、この我らが乘れる船の中に、先を爭ひて入り來。そが中には、墨染の顏したる印度人も交れり。「これ召せ」「かれ召せ。」とすゝむるにや、囀りいとかしがまし。「陸にのぼり給はんとならば、われ道しるべせん。」などうるさく言ふ。さ

上海　支那江蘇省松江府にある東洋第一の貿易場。

早ら　天保十三年。

れど上海に懲りつれば、え往かじ」とて、船の上よりなほ見れば、高き山の麓より峯まで鐵道敷きて、汽車の下り上るさま目の前に見ゆ。いと危げにて、手に汗にぎらるゝやうなり。此處ももとは清國のしる處なりしを、早う英人の間に領せられて、そが手してぞかくは良き港に開かれにける。

あはれ、亞細亞の國民よ、とく目さませかし、永く眠り居たらんには、夢の間に己が住む所も奪ひ盡されて、この民どものやうになりぬべきなど、やくなきことを心の中にくりかへしつ。其の夜、故郷なる親しき友のもとに、文かき送るとて、

敷島のやまと國民こゝろせよ
亞細亞の陸路せばくなりにき

香港はめぐりみな山に圍まれたれば、船のかゝりたる處より望めば、恰も湖上に浮びたらんこゝちす。午の時ばかりより、暑さえもいはず嚴しう成りもて行くに、室の内はさゝやかなる窓をさへ閉ぢつれば、風は少しも入らず。さりとて人々のいたくそゝのかしつるを、「往かじ。」といなびつるものを、今更になど、負けじ心にすまひて、うめき暮す。午後二時過ぐる頃より、風吹きいでて暑さを拂ふ。いと嬉し。夜に入れば、山の頂より始めて、麓の市街にともしつれたる燈火の光、晴れたる夜の星にまがひて、いと涼しげなるに、たなびく雲のひまより、夕月の影花やかに匂ひ出でたる、いとをかし。

此の船は佛國のなれば、船長はいふも更なり、乘合ひたる客も其の國なるが多くて、故郷へ歸るさの船客なれば、いといたう心行きて見ゆるも理りなり。今宵は酒など汲みかはして、かの國風の歌など謠ひさゞめく。面目いと誇らしげなれど、我等が爲には楚歌を聞くこゝちぞする。故國を離れぬる程は、遙けき旅路に上る身の、心弱くてはと念じて、老いたる親のおまへにも、涙は見せ奉らざりしはや。されどかう立別れまゐらせては、雨につけ風につけて、胸うちさわぐことのみ多かるを、況して、われ、かれに一歩を讓らざるを得ぬ今のたゝずまひも、國の内に在るほどは、かばかりにやは感ぜし。見るもの聞くものごとに、口惜しうも、悲しうも、

いきどほろしうも、淺ましうも、覺ゆることのみさはなるを、かく數ならぬ身にて、何しにひとの國には渡らんの心はつきけんとまで、自らの言ひがひなさを思ひ知らるゝ事のみなるも、力なき女子と生れぬる宿世、はたいかゞはせん。ただ物狂の中にのみこそ數まへられつべけれ。（明治才媛文集）

大町桂月　土佐の人、名は芳衛、桂月は月下漁郎の號なり、文學士、文章家。

一榮一落云云　菅原道眞左遷の途中にて詠ぜし句。

二〇　四時の變遷

大町桂月

「一榮一落これ春秋」と云ひけん。暑往き寒來るは天の道なり。壯なる者は老い、盛なるものは衰ふ。人の身の上もまた陰陽消長の理には洩れず。女子一生の經歷、殊に四時の變遷に似たるを感ずるなり。

春は天地の少女なり。少女は人生の春なり。東風そよそよと吹くまゝに、結びし氷とけて、谷水潺湲たる聲を發して流るゝは、みどりごの搖籃の中に始めて日の光を仰ぎて、呱呱たる聲を放ちて乳を求むるに喩ふべし。燒野の上に萠えそめたる蕨の芽の纖柔なるは、みどりごの手足の纖柔なるに彷彿たり。やがて咲きいづる花の色は、をとめ子のにほへる俤をうつし、枝より枝にとびかひて囀る鶯の聲は、をとめごの謠ふ節にかたどれり。されば人々白たへの袖ふりはへて、野に山に春の景色を尋ねて、ひねもす打興ずるが如く、少女の可憐にして、やう〳〵およずくるを見ては、世の辛苦にやつれし父母もなぐさめられて、心おのづから長閑

なるべし、げに春は樂しき時候なり、少年は樂しき時代なり。されど徒らに花鳥にうかされて、田の面をすきかへしつゝ種子を下すことを怠りなば、秋の收穫は得られざらん。盛*年は重ねて來らず、時に及びて勉强せずして、老いて臍を嚙むとも、また及ぶべしやは。

盛年は重ねて來らず　晉の陶淵明の語。

春去りて夏となりぬれば、木々の花散りはてて、梢には綠の葉のみぞ繁かりける。少女子の、年長じては友禪の振袖をぬぎかへてよそほひ、復はでなるを旨とせず。此の際に及びては、父母の膝下にのみはあらず。さま〳〵の人に交るにつれ、世の弊風にそみ易きこと、花散りし梢に毛虫のつき易きが如くなれば、深く愼みて、白絲*・岐路のなげきを免るべ

白絲岐路のなげき　楊子は岐路を見て歎き、墨子は白絲を見て泣けり。

きなり。かくて年ます〳〵長じて、人の家に嫁すれば、姑につかへ、夫につかへ、小姑にまじはり、奴婢を使ふなど、身のつとめいやますにつれて、心の苦みいやましにますは、なほ夏深くなるにつれ、暑さはげしく、蚤・蚊など多くなりて、安らかに眠ることを得ざるが如く、春のたのしきにひきかへて、心苦しきことといふべうもあらず。時には恨を子規に寄せて、血を吐く思もあるべく、時にはまた夏*瘦と答へて忍ぶ涙もあらん。

夏瘦と　夏瘦と人に答ふる涙かな。（かをる）

秋の初云々　秋の初になりぬれば、今年も半ばは過ぎにけり。我がよふけゆく月影の、傾く見ることを悲しけれ。

秋*の初になりぬれば、今年も半ば過ぎしなり。わがよふけゆく月影は、いと〻憐を添ふれども、暑さ消えて、朝夕の風すずしく、起居いとやすくなりぬるは、女の身のあまたの苦み

をなめて、人の心の賴み難きを、さとり、巧に世に處する法を覺えて、また苦しとも思はざるに似たり。やがて西ふく風身にしみて、蟲の聲々あはれなるも、しかすがに七草の花、春の花にもまして、一種可憐の趣あり。女の身も亦色香やゝ失せぬれど、禮節にならひて、よろづまめやかなる風姿は、少女にもまさりて尊きを覺ゆるなり。かくて五穀・果實など全く熟したれば、收穫終りて、百姓ども皆太平樂を謠ひ、和氣洋々として鎭守の森に溢るゝは、玉の如き男子、花の如き娘ども、いくたりとなくやゝやすらかに生みて、一家團欒の中に、無量の快樂自ら生ずるが如く、心にかゝる浮雲晴れて、願望の月いとゞまどかなるべし。

立田川　大和國生駒川の下流、南流して大和川となる。

科戸の風　風を司る志那都比古・志那都比賣の二神の吹かす風。

秋往いて冬の初になれば、小春日和うるはしく、長閑なること春にも劣らず、鳥の聲々滑らかにして、立田川邊に錦流るる有樣は、年老いて世累なくなり、數多の子ども皆膝のほとりに集りて、反哺の孝を盡すによりて、老母の心の閑かにして樂しくなりたるにも譬へつべし。科戸の風はげしく吹きまさるまゝに、木の葉ちりはてて、滿園皆枯木となりて、いとゞさびしくなりぬるは、齒落ち、目くぼみ、腰は梓の弓と曲り、額の皺は齡の數と共に添ひ、形容枯槁して、見る影もなくなれる人の身の上に異ならず。かくて寒さいよ〳〵つのり、山川草木悉く白雪の中に埋れて、一年空しくこゝに終る。人の齡もまた愈〻加はり、白髮雪と相映じて、いとゞすさまじ

く、遂に無常の風にさそはれて、一命窮陰と共に空しくなりぬべし。觀ずれば四時自然の理、春あれば秋あり、人間必須の勢、生あればまた死なきを得ず。迷へば南山の齡も短く、悟れば蜉蝣の一期も長し。人生夢と見るもはた眞と見るも、一に人の心の如何にあり。天地自然の變遷を解するものにして、始めて共に人生の事を語るべきなり。（天紀小紀）

南山の齡　南山は終南山を云ふ、長壽を祝する辭。

二一　新年のたより

北垣種子

一　年たつけふの御壽

年たつけふの御壽、恐れ多くも玉だれの御内を始め奉り、千里の末の伏屋まで、同じ事に祝ひをさめ候。まづ〳〵御方様にも皆々御揃ひ、御機嫌よく御重歳遊ばされ、千代のかずかず御目出たく存じあげ奉り候。さてとや、ふる年中は取分け淺からぬ御配神を蒙り、せまき袖には包み餘る嬉しさ、筆にも言葉にも盡し難く、厚く御禮申しあげ候。猶相變らずよろづ御指導たまはり候やう、幾重にも願ひあげ奉り候。次に私方いづれも甲斐ある年を迎へ候まゝ、憚りながら御心安う思召し下されたく候。まづは年の始の御祝詞までに。めでたく、かしこ。（現代名家書簡文集）

北垣種子　故男爵北垣國道の妻、此の賀狀は故公爵伊藤博文の妻梅子に寄せたるものなり。

二　新春母の許へ

頼山陽

新歳の慶千里同風めでたく申納め候。先づ以て御機嫌よく遊ばされ、御超歳の御儀と遙想、恭祝仕り候。私方長幼無

頼山陽　安藝の人、京都に住せり、名は襄、通稱久太郎、頼春水の子、漢詩文。書をよくせり、天保三年歿、年五十三。

辰藏　京都にて生れたる長男。

三穂　山陽の妹。

異加齢仕り候。萬々御安意下さるべく候。

冬歳は尊書久々にて相達しありがたく拜誦仕り候。その節寒氣の御障りもあらせられず、御氣丈御世話あそばされ候旨、恐慶の至りに存じ候。その節は思召しよられ、辰藏へ春服御贈り下され、頂戴致させ申候。色も仰せ下され候とは違ひ、甚だ似合ひ申候。模様も御好みあそばされ候事と相見え、大いに男らしく御座候。三穂よりくれられ候羽織も、縞柄大いに辰藏に似合ひ申候。當春は昨年とはちがひ、元日・二日など大いに寒き事、雪も降り申候。三日は頗る長閑に御座候ゆゑ、昨年祇園へ參り候事存じ出で、小池八幡宮へ、私・門生兩人、かはるゞ抱き候て參詣いたさせ申候。その

餘一　山陽の子。

南　山陽の叔父杏坪の子采眞。

の節、かの拜領の綿入に、三穂よりもらひ候羽織着せ、連れまゐり申候。「おば様にもらうたのぢや」と、度々申聞け候ゆゑ、「おば〳〵」と申すこと覺え言ひ申候。よく歩き申候。少しの間も目放しなり申さず候。さて、「子を持つて親の恩を知る」とは、よく申候ものと存じ候に御座候。餘一などは、皆あなた様御世話にて成人仕り候ゆゑ、苦勞を覺え申さず候との事に御座候。

此の度例年の如く、鏡餅一重、砂糖一曲差上げ申候。めでたく御祝ひ遊ばされ下さるべく候。舊臘あげ申候三輪酒は、相屆き申候や。三千三へ遣はしたしと申す一品、又御慰みにも相成るべくと、畫本四册上げ申候。御覽後、南の子供に

遣はされ下さるべく候。梨枝より何かと申上ぐべく候、之を略し候。猶永春の時を期し候。頓首。（日用名家の手紙）

梨枝 山陽の妻。

二二　鎌倉一見の記

正岡子規

面白き朧月の夕、柴の戸を立出でてそゞろにありけば、幻かと見ゆる往來のさまもなつかしながら都の街を離れたる景色のみ思ひやられて、新橋まで急ぎぬ。「終の列車なるに、はや乘れ」といはれて、我後れじと込入れば、春の夜の夢を載せて走る汽車、二十里は煙草の煙のくゆる間にぞありける。

蛙鳴く水田の底の底あかり

藤澤の旅籠屋を敲いて、一夜の旅枕と定む。朝とく目覺むれば、裏の藪に鳴く鶯の一聲二聲も嬉しく、

鶯や表どほりは馬の鈴

一番の汽車にて鎌倉におもむく。道々うかみ出づる駄句の數々、

家ひとつ梅五六本こゝもく

旅なれば春なれば此の朝ぼらけ

先づ由比が濱に隱士をおとづれて、久々の對面嬉しやと、つおいつ語り出づる事は何ぞ。歌の話、發句の噂に、半日を費したり。即景、

春風や起きも直らぬ磯馴松

獨りふらく〜と浮かれ出でて、畷づたひにあゆめば、行くと

正岡子規 伊豫の人、名は常規、別號獺祭書屋主人、竹の里人、日本派の俳句を興す、明治三十五年歿、年三十六。

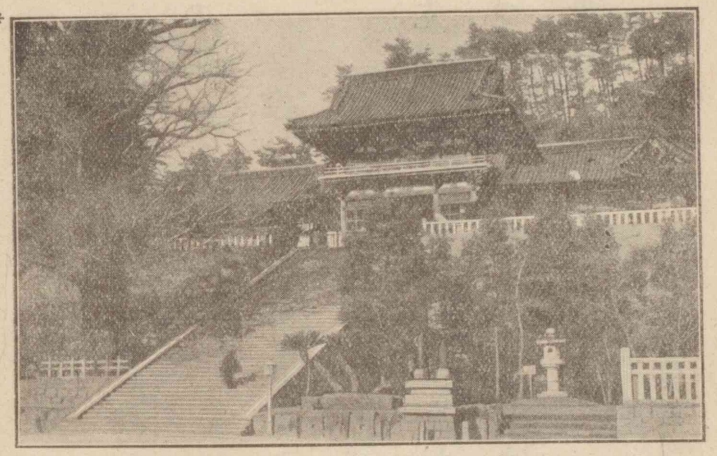
新橋 東京市芝區東海道鐵道舊起點。

藤澤 相模國鎌倉・高座郡に跨る、東海道の名驛。

由比が濱 相模鎌倉郡鎌倉の南、稻村崎より滑川口に至る海濱。

もなしに鶴*が岡にぞ着きにける。銀杏を撫で、石壇を攀ぢ、廣前に稽首したる後、瑞垣によりて見下せば、數百株の古梅やや盛りを過ぎて、散りがたなるもあはれなり。

銀杏とはどちらがふるき梅
のはな



八幡宮

*建長寺に詣づ。數百年の堂宇、松杉苔滑かに露深し。

陽炎となるや滅行く古柱

*圓覺寺は木立晝暗うして、登りては又登る。山の上、谷の蔭、

鶴が岡　鎌倉町の北偏、鼓に鶴岡八幡宮あり。

建長寺　鎌倉五山の一、鎌倉山の内にあり、巨福山と號し、臨濟宗建長寺派の大本山。

圓覺寺　鎌倉五山の一、四の内にあり、臨濟宗圓覺寺派の大本山、瑞鹿山と號す。

星月夜の井　鎌倉坂の下、極樂寺の切通へ上りかゝる處にあり、昔此の井の中に星の影見えし故に名づく。

長谷の觀音堂　鎌倉字長谷にあり、寺を海光山長谷寺と號し、觀音像は大和長谷寺の靈佛と同木異工の作と稱せらる。

日蓮　法華宗の開祖安房國敢川村に生る、貫名重忠の子、身延山を開く、弘安五年武藏池上に寂す、年六十一。

日朗　平賀有國の子下總平賀本土寺を開基す、元應元年武藏池上に寂す、年七十八。

大佛　觀音堂の北六町にあり。

草屋・藁屋の趣尊げなるに、座禪・觀法に心を澄す若人こそ殊勝なれ。

其の夜は由比の浦浪を聞きつゝ、夜一夜、旅の疲の寢心に、くたびれたる兩足蹈みのばせし心よさ。

曙の頃、隱士と某と三人して、濱邊より星*月夜の井にいたる。

鎌倉は井あり梅あり星月夜

*長谷の觀音堂に詣でて、見渡す山の名所・古蹟、隱士が指さす杖の先一寸の内に集りたり。

歌にせんなに山か山春の風

こゝは何、かしこは何「日*蓮の高弟日*朗の土窟は此の奥なり」。

など、一々隱士の案内なり。大佛は昔にかはらぬ御姿なが

らも、其の御心には、數百年の夢幻何とか觀じ給ふらん。昨日見し人は今日見る人にあらず、今日見る人は明日見ん人にもあらじ。況して今の人、七百年の昔も知らねば、七百年の昔、いかでか今の世を推量らん。

大佛のうつら〳〵と春日かな

此の夜はまた隱士の家にやどる。「浪音高し潮や滿つらん」。と、頻りに口ずさみて、上の句置煩へる隱士の聲ほのかになりて、我が夢はいづくの山をか駈けめぐりし。

翌日は雪の下に古跡を探る。興亡の感くさ〳〵に起りて、そゞろに胸を衝く思あり。

雪の下　鎌倉の大字、鶴岡の南なる大路の邊をいふ。

高殿の三つば四つばの跡訪へば

三つば四つば　この殿はうべもとみけりさきくさのみつばよつばに殿づくりせり（催馬樂）

麥のふたばに雲雀鳴くなり

いつの世の庭の形見ぞ賤が家の

垣根つゞきにほふ梅が香

頼朝の墓こゝぞと上り見れば、蔦にからまれ、苔蒸したる五輪の塔一つ。此處が天下の總追捕使のつひの住居にぞありける。鎌倉の宮に詣でて神前に跪けば、何とはなしには

總追捕使　鎌倉幕府の職役、後、守護と改む、頼朝は總追捕使の統領たりし故、自ら日本總追捕使と稱せり。

や胸ふさがりて、はふり落つる涙拂ひもあへず。

梅が香にむせてこぼるゝ涙かな

泣く〳〵鎌倉を去り、再び俗界の中に筆を採りて、鎌倉一見の記とはなしぬ。（獨祭書屋俳話）

二三　女と趣味

巖谷小波

巖谷小波　名は季雄、漣山人・大江小波とも號す、書家一六の子、少年文學の大家。

婦人のなよやかな容姿と、やさしい心とは、如何ばかり人生に美しさと濕ひとを添へて居ることであらう。秋の野に咲く千草の花が、行きくれた旅人の目を慰め疲れを醫する如く、吾々の生活を美しく彩り、其の苦みと惱みとを癒やすものは婦人で、婦人はまことに人生の旅行に咲く花とも見るべきものである。若し此の花がなかつたならば、吾々の生涯は、恰も沙漠を辿るが如く、荒寥・索寞たるものに相違ない。されば東西の詩人も、女を歌へば必ず其の美を稱へて居る。併し茲に婦人の美と稱するのは、單に其の容色をさすのではない、愛に滿ち情に溢るゝ其の心をいふのである。

その愛その情が花と咲いて、やがて男子を勵まし、夫を慰め、子弟を慈しみ、社會を圓滿に平和に潤澤ならしむる點に對して、多くの敬意を拂ふのである。乃ち男性を智・意の化身と見る如く、女性を情・愛の權化として、其の存在を謳歌するのである。之を實際に見るも、愛なく情なき婦人は、何人にも愛せられるものではない。愛情を生命とする婦人にして、始めて萬人の敬愛を受けるは事實である。

既にかくの如く愛情を婦人の生命とする以上、婦人は何處までも此の領域に據つて、世に立つ事を忘れてはならぬ筈である。然るに近來の婦人の中に、此の本領を沒却し、此の天職を無視して、男子に拮抗し、男子と同樣の態度をとり、男

子と同一の權利を要求し、男子と同樣の方面に向つて働かうとして居るものがある。　自分は必ずしも女子が發達の上からして、男子と同樣の働が出來ないとは云はぬけれども、以上に述べて來たやうな事實と、適材を適所に置くといふ見地とから、かくの如き自覺は、社會上はた人物經濟上に、極めて不利益なことと思ふと同時に、寧ろ其の優婉な態度を持して、人類社會の花となり、吾々の生活に色彩を添へ、其の溫かな純な愛情によつて、慰安者の地位を保つた方が、婦人自身の爲にも幸福ではあるまいかと思ふ。　すなはち理智の方面は暫く之を男子に讓り、之に代ふるに其の特長たる愛情を以て、男子を助け男子を勵まし、世の中をばますますす圓滿に平和に向けることを、心掛けてもらひたいものである。　かくてこそ「柔よく剛を制す」るたとへの如く、男子をして婦人の人格を認め、敬意を表するに至らしめるであらうと思ふ。

石は堅い冷たいもので、綿は柔かい溫かいものである。　今綿が石を眞似て堅く固まつて了つたら、其の綿の價値は全く失せて、誰も見向く者はなくなるであらう。　これ柔かい溫かみといふ綿の特長を沒却し、綿は綿として石に勝る働のある事を忘れたからである。　自分が婦人諸君の理智に奔ることを誡めて、溫かい純粹な愛情を以て、其の生命とせられる事を望むのも、畢竟此の意味に外ならぬ。

ところで此の愛情の純化といふことは、何によつて得られるかといふに、私はこれを優美な趣味の涵養にあると答へたいのである

申すまでもなく、趣味の高下は人格の高下を意味するもので、これが涵養は人格を向上せしめ、品性を陶冶するものである。

雨を怨みず風を嘆かない花木を手にして、生花の技に耽るとき、其の人の心は花の如く清いものであらう。優婉・悲壯な歌曲を奏する時、身は曲中にあつて、また他を顧みるに暇がなく、春の野に据ゑたカンバスに對する時、己も亦花に戯れる胡蝶の如く、悠々として畫面に漂ふの感があらう。かくして高潔な趣味は、知らず識らず人その者を感化して、人格を高め品性を高めるのである。

籬に咲いた花の一枝を取つて、床に活けると云ふことは、啻に自己の目を喜ばせ、他人の心を慰めるといふばかりでなく、其の花を手にする間に於て、既に〳〵優しい美しい花の如き感化を受けて居るのである。

ある司法官は、罪人の職業を調べて、「同じ勞働者でも、土工や石工よりは、植木屋には犯罪が少ない。」といふ事實を確めたさうである。優美な仕事が、不知不識の間に良好な感化を及ぼすといふことは、此の一例によつても明かである。私は優美な趣味の涵養といふことを、特に今日の婦人諸君に

お勸めしたい。（新家庭）

二四　桃の嫩葉

上杉治憲

女子は我が家を出でて、夫の家を家とし、我が父母を離れて、夫の父母を父母とするものにて、孝・貞の二つこそ婦道の第一なれ。孝とは舅・姑に事へて敬愛をつくすをいひ、貞とは夫に事へて節操を正しくするをいふ。「孝子深愛の心あれば必ず和氣あり。和氣あれば必ず愉色あり。愉色あれば必ず婉容あり。」舅・姑をいとほしく大切に思ふ心深ければ、相對したるとき自然と氣和して、違ひ戻ることなきものなり。其の氣和げば、おのづから顏もにこやかになり、顏色にこやかになれば、おのづから身の起居振舞もしとやかにして、能く物に順ひて逆ふことなきものなり。

上杉治憲、舊米澤藩主、號は鷹山、明君の聞え高し、文政五年卒す、年七十二。

孝子云々　禮記に出づ。

上杉治憲銅像

されどこれらの事、眞實より出づるにあらずしては、こしらへものにて、一朝一夕は飾り得ても、竟には其の僞あらはれて、舅・姑にも見限らるゝぞかし。

若し眞實の誠だにあらば、當時行屆かぬことありとも、いつしか其の誠顯はれて、舅・姑をも感ぜしむべきなり。「聲なき

聲なきに云云　離婁に出づ。

に聽き、形なきに視る。」といふ。誠よりするにあらずしては、何ぞかくの如くなるを得ん。女は人に適きては、終身我が父母に事ふるものにあらざるを、人情として我が父母のみ慕はしく思ひ、また生るゝより見習ひたれば、生家の事のみ善しと心得る故、舅・姑・夫への事へ方も疎かになり、家事も生家の風にのみなしたくなるより、人々の心にも違ふやうになるなり。已に其の家に嫁する上は、何事も舅・姑・夫の命を承りて、其の家風に從ふ

一國家ハ先祖ヨリ子孫ニ傳ル國家ナリ　我私ノ物ニ非ズ

一人民ハ國家ノ爲ニ生ル人民ナリ　我私ノ人ニ非ズ

一國家人民ノ爲ニ立ル君ナリ　君ノ爲ニ立ル國家人民ニ非ズ

忠三郎治遺愛ノ風教ノ事

天明三年二月七日　治愛

上杉治憲筆蹟

べきなり。かく言へば、女子は我が父母に孝を盡すことはならぬやうなれども、さにはあらず。他門に嫁して、舅・姑に善く仕へ、夫婦の間も睦まじく、子孫繁榮するを見ば、我が父母の心にては、如何ばかりか嬉しからん。孝は父母の心を悅ばしめ安んぜしむるに如くことやはある。我が父母の嬉しく安んじ給ふやうに、舅・姑・夫に事ふること、是卽ち我が父母に孝を盡すなり。（桃の巖葉）

二五　中島歌子

安政の初、鎖國・開港の論が沸騰して、攘夷の主張者水戸中納言齊昭公*が、蟄居を仰せつかると、水戸藩でも攘夷・開港と分

齊昭　水戸藩主、治紀の子、景山と號す、萬延元年薨ず、年六十一。

櫻田の變　萬延元年三月三日、水戸の浪士十九人（一人は薩人）井伊直弼を櫻田門外に刺殺す。

れ、正奸の黨を立てて、互に爭ふやうになつた。その餘憤は*櫻田の變となつて、幕府は益〻水藩の志士をおさへる。そこで正黨は水戸を本陣として、愈〻兵を擧げた。時に文久二年で、後年の歌人中島歌子も、まだ緋手柄の新妻、結婚の翌年十九歳の六月である。夫林忠左衛門は正黨の頭株であつたが、嘗て陣に赴く時に、「此の五軒町の我が家は、古來忠臣義士の遺跡である。輕々しく土民の足下に汚させてはなりませんぞ。」と、堅く歌子をいましめた。歌子は、「そは決して御心にかけ給ふな。」と清く言切り、義妹てつ女と嚴重に留守居をした。さて奸黨の暴威は日に勢を得て、正黨の人々は身を置くに處もないと云ふ程なので、歌子は常に夫を天井裏に

久留里　上總君津郡、木更津の南六里、黑田氏の舊城地。

匿したが、奸黨は竟には其の家を燒拂はうとしたので、歌子は早くも之を覺り、夫を間道より落した。歌子は遙かに夫の安全を祈り、且夫の名譽を辱しめまいと、懷劍は肌身を離さず、事あれば細腕ながらも、目釘の續く限り斬りまくつて、力の及ばぬ時には、自刄して地下で夫を待たうと決心してゐた。奸黨は終に藩命を楯に、正黨の家族を捕へて質とした。月の冴えた霜夜、澁田の獄には、幾多無辜の妻子が、寒に泣いて涙も凍るばかり、歌子も義妹も其の數である。正黨派は遂に敗亡した。忠左衛門は松平大炊頭を始め、同志の面々と自訴して、赤心を吐露することに決し、重傷の身を支へて、幕軍に投じた。翌年正月、*久留里藩に御預けとなつた

が、銃創の爲に、あはれ、二十五歳を一期として牢死した。斯かる間に騷亂が略〻平いだので、歌子は親類の病氣と云立て、澁田の獄を出た。　出て聞けば、夫は獄中で無殘の最期、それに同志の者の罪狀きまり、夫の死骸は發かれて梟首となり、家は闕所と云ふことである。　今はこれまでであると、心の用意をする時しも、夫の同志が密かに依囑の遺物を齎した。震ふ手に執つて見ると、これこそ往ぬる日、我が手づから仕立てた肌衣、白羽二重の筒袖、袖口には錦の副輪とり、引締める長の打紐も新しく、まだら〳〵の熱血は、其のまゝな牡丹花か、葦手とからむ自詠自筆の墨くろ〴〵と、背の眞中に、

梓弓引きてかへらぬ武士の

川越　武藏國入間郡。

なからむ後の名こそ惜しけれ

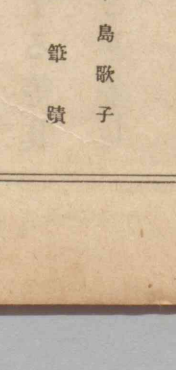
歌子は悲憤の涙を拂ひつゝ、此の歌をくりかへせば、心は無明の雲の晴行く如く、また夫の叱咤を聞く心地して、夫の惜しい後の名に光を添へるは、我を措いて誰ぞと、再び滿腔の精神を奮ひ起し、同志の人にも深く謝し、自らは義妹と、晝は山に伏し、夜は野を行き、やう〳〵に川越に着いて母に謁し、又江戸に出で、埋れ木の身ながら義妹を養育した。　やがて明治の御代となると、奸黨の首領市川三左衛門は官軍に誅せられ、次いで我が家の再興も許された。　歌子は命ながらへた甲斐はあつたと喜んで、林家は義妹てつ女に養子して之を繼がせ、己は中島家に留り、老母を養ふの傍敷島の道を

樂しみ且之を弘めた。　元來歌子は武藏の鄕士中島又左衛門の一女で、弘化元年の生れ、幼い時から父母に隨つて江戸に住み、文字を寺小屋に學んだが、のち中*村敬宇の父の門に入つた。　十歳の時、水戸の分家松平播磨守の奥に仕へたが、君の殊遇を受けて忠勤する中、はや十五歳になつた。　時に水藩の士で、櫻田武士の一人なる黑澤忠三郎が、其の人物に感じて自らこれを養ひ、甥の林忠左衛門に配したのである。忠左衛門は水戸藩の士で、百五十石を食み、文武兩道の達人で、賴もしい青年であつた。　さて歌子は退隱してからは、好みの敷島の道に分入り、歌人林甕男の門に入つたが、ほどなく師に別れ、更に加*藤千浪の門人となつた。　天賦の才と勉

中村敬宇　名は正直、江戸の人、幕府の儒官、文學博士、明治二十四年歿、年六十。

加藤千浪　陸奥の人にして江戸に住す、國學者、明治十年歿、年五十八。

學とで、めき〳〵と才があらはれ、高貴の子女達で、其の道の教を請ふ者も日に增し、終に畏きあたりのお聽にも達し、數〻宮仕を勸められたが、身に病もあり、かつ老母への孝養の缺けるを心苦しく思うて、堅く辭退し、折々賜はる御題を詠じて奉るばかりであつた。　次のは其のうちの一二である。



中島歌子の筆蹟

しらゆきの消えにし日より音羽山
　峰のあらしもきこえざりけり

いつの間に積りし今朝の雪ならむ
　あかつきまでは月も見えしを

山清水くむ人絶えし後にこそ
濁なき世の影は見えけれ（「婦人美譚」に據る）

二六　諺と道德

諺は廣く一般民庶の間に行はるゝ一種の格言にして、常人は之を準則として、善惡・理否を判じ、進退・動止を決する等、其の勢力著大、世人の行爲を指導し、情意を左右すること多し。「鷹は死すとも穗は摘まず。」「武士は食はねど高楊枝。」のごとき、武士道の精神を發揮し、國民の廉恥心を養成したる功頗る大なり。衣食の爲に、動もすれば道心を失ひ卑劣の情を發するに際し、此の諺に鑑みて自ら恥ぢ、過なきを得たる類蓋し少なからざるべし。而して諺の教ふる所は、利害得失を計較し、自己を中心とし、危險を避け、失敗に陷らざるやう、警戒を與ふるもの多くして、善に向つて直前・邁往の意氣を鼓舞する類は割合に少なく、禍福の常なく、希望の實現し難く、人智の不完全にして、世事の意料外なること多きを說きて、人の注意を促す類、多數を占むるに似たり。

金錢の出入・用途・利弊等は、吾人が日常の生活と密接なる關係あるを以て、各國共に此の類の諺に富み、*ワンデルは金錢に關する俚諺を採錄すること、千六百餘に上れり。概して節儉・力行を奬勵して、「塵積りて山をなし、」「雀の巢もくふにたまる」の理を敎へ、「稼ぐに追ひつく貧乏なき」を唱說して、湯水

ワンデル　獨逸の人、獨逸俚諺辭典を著す。（1803—1880）

の如く財を使ふ愚を戒むれども、ひたすら蓄財に耽りて吝嗇に陷る弊を指摘して、「金の番人」となり、「寶のもち腐れ」となり、「小利大損を招き」、「一文吝みの百失ひ」たるを戒む。又一朝にして金を得んとする者の、不正の手段を用ふるに至り易きを戒めて、「一年の内に富まんとする者は、半年の内に刑せらる。」といひ、「財悖りて入るものは、また悖りて出で」、「惡錢の身につかざる」をいふもの頗る多し。支那の「空裏得來空裏去」。獨逸の「得たるが如く失ふ。」及び「不義の一錢は正義の一兩を滅す。」西班牙の「人の物は主を戀ふ。」皆これなり。陰德あれば陽報あり、積善の家には餘慶ある意を語りては、「門の外より施せば、窓の中へもどつて來る。」といひ、慾に頂なく、足ることを知らずして、終に身を滅すに至るべきを諭して、「慾の鵠股をさく。」といひ、「貪慾は袋を破る。」といふ。

門の外云々　英國の諺。

「金もち金をつかはず。」庫中徒らに菌を生ぜしめ、唾壺と汚穢を爭ふ者のために、一服の清涼劑たるべきは、*タルマッドの「施與は富人の鹽。」といへる一語なり。空しく蓄積して世用をなさず、財を腐らせ併せて身を腐らす者にありては、施與・慈善は絶好の防腐劑たらずんばあらず。諺はかくの如く、施與・分財を勸告すると共に、其の方法について周到なる注意を忘れず、「大風に灰を撒き」、「唐へ投金」、「淵へ鹽を投ずる」が如き無謀の慈善・濫與を警戒して、與ふる者、受くる者、ともに中庸を得べきを教へて曰く、「*手から蒔いて袋から蒔くな。」

タルマッド　猶太の古典、教訓の義。

手から云々　グリーキの諺。

明日も云々 デンマークの諺。

「明日もやれる程今日もやれ。」と。金を積みて北斗を支ふとも、冥途のみやげとならず、財貨も亦無常の敵を如何ともする能はざるを説いて、伊太利にては、「壽衣にかくしなし。」露西亞にては、「黄金も天に飛ぶべき翼なし。」といへり。

財産・地位・名望等、すべて自己の利益となるべき者について、自ら力めずして妄りに他を羨み、徒らに「隣の寶を數へ、」「牡丹餅の棚より落下する」を望み、「天の落つるを待つて、雲雀を捕へんとする」が如き卑屈なる惰心を鞭撻し、獨立自尊・克己・忍耐等の諸德を鼓吹する男らしき諺少なしとせず。「男は裸百貫」なり。自ら奮つて自家の天地を開拓すべし。「成敗・利鈍は天なり、」「世は七轉び八起き」なり。「男の心と大黒柱は太いうへにも太かれ。」「當つて碎くる」覺悟なかるべからず。「樂は苦の種、苦は樂の種、」「不受苦中苦、難爲人上人。」の如き、いづれも異口同音、盛に黽勉・努力の德を敎ふるにあらずや。

「稼ぐに貧乏追ひつかず。」「蜂蜜々々と連呼するのみにては、蜂蜜は口中に來らず。」「神は自ら助くる者を助く。」「怠け者の頭には神宿らず。」汝の務むべきを務めて、然る後其の結果を天に委ねよ。自ら助けずして、神の助を呼ぶの權利なし。希臘の古諺にいはずや、「神を祈らば自身も働け。」と。

「我が物食へば寵將軍」なり。我が汗に食ひ、我が家に居る、俯仰天地に愧ぢず、たれか得て我を左右するものぞ。「われに口あり、人に囑して吹かしむる勿れ。」とは、自ら事を處するの

快を敎ふる西班牙の諺なり。

一敗を以て志を挫くべからず。財を失ふとも憂ふるに足らず、地位・名望を失ふも猶可なり。意氣・精神を失ふに至りては救ふべからず。「帽を失ふとも、頭を失はず。」「指環を失ふとも指は存せり。」物を失ふも、われを失はざれ。指環は再び得べし。指は改め作るべからず。帽子なきも頭は頭なり。指環なきも指は指なり。瑣々たる外觀何ぞ我を煩はさん。時不可にして一旦下位に居るも、一片耿々の心猶存するものあらば、再び青雲の上にあるべきものなり。若き人々よ、自ら賴んで事を成すべし。然れども、「*鎡基ありといへども、時を待つには如かず。」「人事を盡して、徐ろに天命

指環を云々　スペインの諺。

鎡基云々　孟子の語。

を待つ」の度量なかるべからず。「果報は寢て待て。」とは、正に此の意なり。自ら爲すべき所を爲して、多く期待せざる者は、おのづから神寵を得て、天賚を得べし。泰西の古諺にこれあり、「睡者の網に魚たまる。」と。

俚諺には薫蕕相混じ、正に相反するあり。されば俚諺の訓戒を信條とせんとする者は、其の一方の敎訓に執着して、一切を顧みざるが如き愚に陷る事なく、相反せる諺をも參酌して、所謂「太鼓をうてば鐘がはづれる」の陋を演ずるなかれ。また「毒食はば皿まで。」「濡れぬさきこそ露をも厭へ。」のごとき自暴自棄の惡諺を以て、己の罪過を辯護せんとするが如き事なく、能く其の佳良なるものを奉じて、遷善・進德の具と

なすべし。同一の俚諺も、其の解釋・應用の如何によりて、毒となり藥となること、猶同一草木の花中より「蜂は蜜を吸ひ、蜘蛛は毒を取り、」「牛は水を飲んで乳となし、蛇は水を飲んで毒となす」が如し。戒めざるべけんや。（藤井乙男編「俗諺論」に據る）

藤井乙男
文學博士、日本文學史に精通す、京都帝國大學文科大學教授。

大正女子國文讀本　卷六終

大正七年九月廿五日印刷
大正七年九月廿八日發行
大正七年十二月十二日訂正再版印刷
大正七年十二月十五日訂正再版發行

大正女子國文讀本全拾冊

定價
自卷一・至卷五　金參拾參錢
自卷六・至卷八　金參拾壹錢
上級用卷上、下　各金參拾壹錢

大正十年度臨時定價
自卷一・至卷五　金七拾參錢
自卷六・至卷八　金六拾八錢
上級用卷上、下　各金六拾八錢

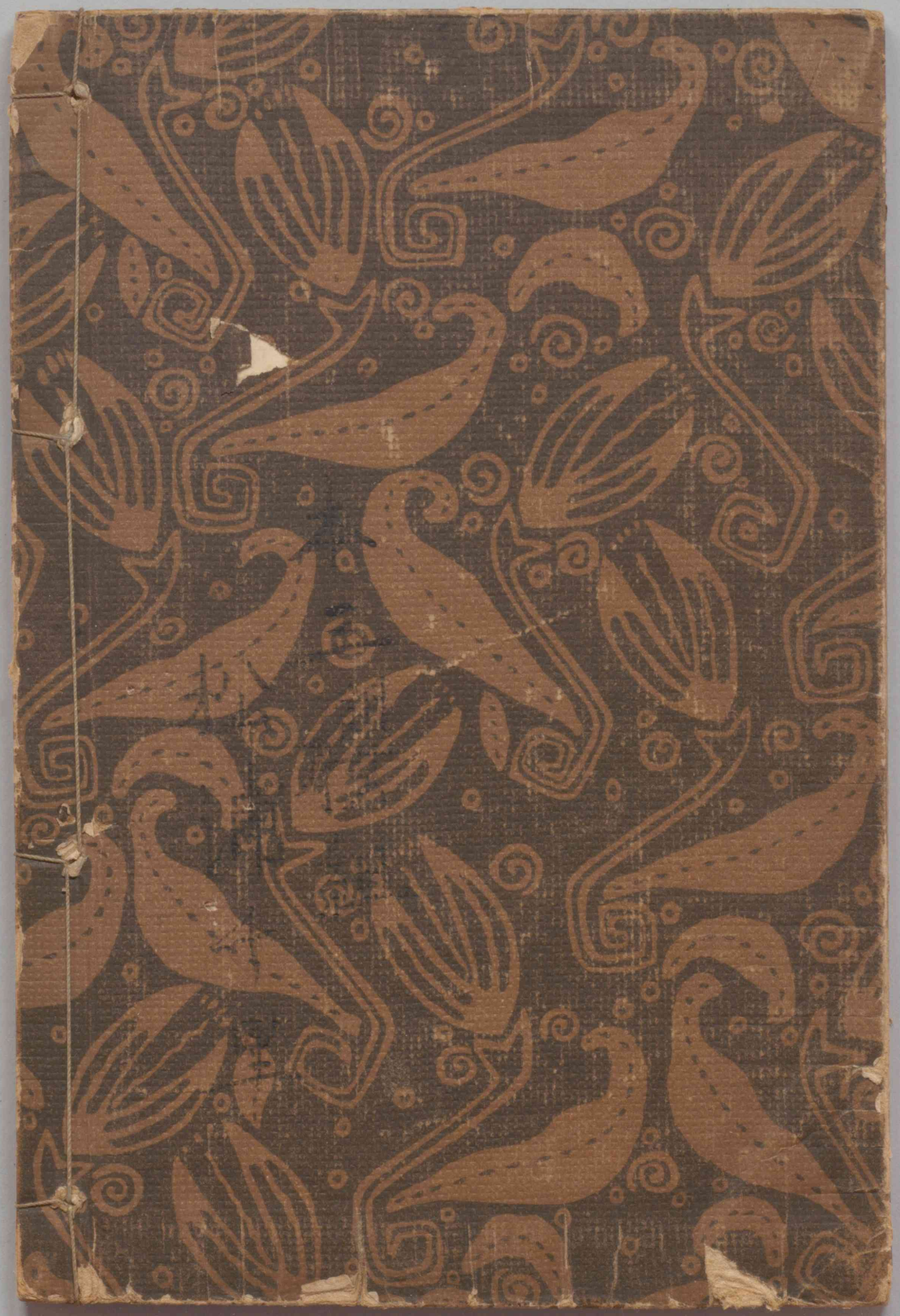
著作權所有

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一

發行者　東京市牛込區白銀町十九番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治

印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町廿九番地　振替口座（東京）七四二一番　合資會社育英書院

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店